

基礎篇第十三課 おみまいに いきませんか : 依頼・勧誘の表現

著者	国立国語研究所
ページ	1-79
発行年	1981-03
シリーズ	日本語教育映画解説 ; 13
URL	http://doi.org/10.15084/00002792

日本語教育映画解説13

基礎篇第十三課

おみまいに いきませんか

—— 依頼・勧誘の表現 ——

国立国語研究所

前 書 き

国立国語研究所では、昭和49年度以来、日本語教育部ついで日本語教育センターにおいて、日本語教育教材開発事業の一環として日本語教育映画基礎篇を作成してきた。これは従来、文化庁において進められていた映画教材作成の事業を新たな形で引き継いだものである。

日本語教育映画基礎篇は、各課5分の映画にそれぞれ完結した主題と内容を持たせ、それを教育の必要に応じて使用する補助教材、また、系列的に初級段階の学習事項を順次指導する教材として提供しようとするもので、全30課を予定している。

映画の作成にあたっては、原案の作成・検討から概要書の執筆まで、また、実際の制作指導においても、日本語教育映画等企画協議会委員の方々に御協力いただいた。ここに厚く御礼申し上げる。

この解説書は、映画教材の作成意図を明らかにし、これを使用して学習し、指導する上での留意点について述べたものである。この解説書がこの映画教材の利用を一層効果あるものにすることを願っている。

この第十三課「おみまいに いきませんか」の解説の担当者は、次のとおりである。

企画・編集	日向茂男（日本語教育センター日本語教育教材開発室）
本文執筆	川瀬生郎（　　　　　//　　　　　日本語教育研修室）
資料1., 資料2.	日向茂男（　　　　　//　　　　　日本語教育教材開発室）

昭和56年3月

国立国語研究所長

林 大

目 次

1. はじめに	1
2. この映画の目的・内容・構成	2
2.1. 目的・内容	2
2.2. 構成——場面を中心として	4
2.2.1. 言語場面, 言語表現についての扱い	4
2.2.2. 言語場面, 言語表現についての解説	5
3. この映画の学習項目の整理と練習問題	27
3.1. 主要学習項目	27
3.1.1. 依頼表現・勧誘表現について	27
3.1.2. 依頼表現「ください」について	29
3.1.3. 勧誘表現「～ませんか」と「～ましょう」について	33
3.1.4. 依頼表現と呼応する副詞	34
3.1.5. 依頼表現を導くための前置き語句	34
3.1.6. 相手に対する呼びかけ	35
3.2. その他の学習項目	36
3.2.1. 許可, 不許可, 必要, 義務, 当然などの意を表す言い方	36
3.2.2. 格助詞「で」の用法について	37
3.2.3. 色に関する形容詞	40
3.3. 練習問題	41
4. 参考文献	45
資料1. 使用語彙一覧	51
資料2. シナリオ全文	73

1. はじめに

この日本語教育映画基礎篇は、初歩の日本語学習期における視聴覚教材として企画・制作されたもので、この映画「おみまいに いきませんか」は、その第十三課にあたるものである。

この映画の企画、概要書（シナリオ執筆のための最終原案）の執筆等にあたったものは、次の通りである。

昭和53年度日本語教育映画等企画協議会委員（肩書きは当時のもの）

石田 敏子 国際基督教大学専任助手
川瀬 生郎 東京外国語大学附属日本語学校教授
木村 宗男 早稲田大学語学教育研究所教授
窪田 富男 東京外国語大学教授
斎藤 修一 慶応義塾大学国際センター助教授

国立国語研究所日本語教育センター関係者（肩書きは当時のもの）

野元 菊雄 日本語教育センター長
武田 祈 日本語教育センター日本語教育教材開発室長
日向 茂男 日本語教育センター日本語教育教材開発室研究員

この映画「おみまいに いきませんか」は、日向茂男の原案に協議委員会で検討を加え、概要書にまとめあげてから制作したものである。制作は、日本シネセル株式会社が担当した。概要書のシナリオ化、つまり脚本の執筆には同社の前田直明氏があたり、また同氏はこの映画の演出も担当した。ただし演出の際の言語上の問題については、協議会委員及び日本語教育センター関係者の意見が加えられている。

本解説書は、日本語教育教材開発室の日向茂男が全体企画・編集を行い、執筆には日本語教育研修室の川瀬生郎があたった。また資料1.、資料2.は、

日向茂男が担当した。全体の企画,また執筆にあたっては,この映画の企画・制作段階での意図が十分生きるよう努めた。

現在,この映画は,より多くの人の利用の便をはかって下記の九か所において貸し出しを行っている。

- 北海道教育庁指導部社会教育視課聴覚教育係
- 宮城県教育庁社会教育課
- 都立日比谷図書館視聴覚係
- 愛知県教育センター企画管理係
- 京都府教育庁社会教育課
- 大阪府教育庁社会教育課
- 兵庫県教育庁社会教育・文化財課
- 広島県教育庁社会教育課
- 福岡県視聴覚ライブラリー

なお,この映画は,そのビデオ版とともに上記制作会社が販売している。

2. この映画の目的・内容・構成

2.1. 目的・内容

この映画「おみまいに いきませんか」は,依頼と勧誘に関する基本的な表現の理解を主要目的とした作品である。この映画の中で,依頼・勧誘の表現として取り上げた言い方は次の6種である。

- (1) 「～をください」
- (2) 「～して」
- (3) 「～してください」
- (4) 「～していただきませんか」
- (5) 「～しませんか」

(6) 「～しましょう」

依頼の表現は、基本的な形として「名詞+をください」と「動詞+てください」の二つに大別することができる。この二つの形には、使用される場面や環境、また使用する階層・話し手の心理・相手・時・手段など実際の状況に応じ、種々のヴァリエーションがある。これら種々の表現形式については、主要学習項目の解説で触れる。なお「名詞+をください」の形は、この基礎篇の第一課「これは かえるです」で早くも登場しているが、そこではほとんど説明を加えていないので、本解説書を利用されたい。

勧誘の表現には、基本的な形として「否定文+か」の形で相手の意志を問う言い方と、「～しましょう」の形で積極的に相手をうながす言い方がある。この二つの形も、場面・相手等実際の状況により種々の言い方になるが、この映画では、学習の基礎的効率性を考慮して、最も基本的だと考えられる上記6種の言い方のみを提示するとどめた。なお、勧誘表現については、第九課「かまくらを あるきます」でも付随的に提示し、その後も各映画の中で言語表現として現れてはいるが、そこでは主要な学習項目としては扱っていないので、この映画で本格的に指導することが望ましい。

依頼・勧誘に関する表現は、話し手が相手に対して何らかの行為を期待し、要求する意図から発せられるものである。話し手の意図が積極的行為に関する強い要求ならば、それは命令的表現ともなり、また、許可・禁止・義務などの表現とも関連する。この映画では、主要学習項目の他に関連学習項目として、次の5種の言い方を提示した。

- (1) 「～してもいい」(許可)
- (2) 「～してはいけない」(不許可・禁止)
- (3) 「～しなくてはいけない」(必要・義務)
- (4) 「～しなければいけない」(必要・義務)
- (5) 「～してみる」(試み)

以上の(1)～(5)については、それを主要学習項目として別に映画を作成の子定である。その他に、学習事項としてこの映画で扱われている主なものに

は、次のような項目がある。

- (1) 助詞「で」の用法（交通事故で、救急車で、これでいかがですか、…
…）
- (2) 説明的言い方「～なんです」
- (3) 数量詞の副詞的用法（白いのを三本ください）
- (4) 発話の起こし方と文の接続（実は、それで、でも、もしもし、等）

この(1)～(4)は、今までの基礎篇の映画の学習項目と関連づけて取り扱うこともできるし、またこの映画でだけの学習項目とすることもできるものである。(1)については、3.2.2.で述べる通りである。(2)の「なんです」については、形容詞や動詞に接続する「んです」の形を第十課「もみじが とても きれいでした」以来学習してきたが、ここでは名詞に接続する形として取り上げている。(3)は、第十一課「きょうは あめが ふっています」以来の学習項目であるが、ここでも学習項目とすることができる。(4)は、第十二課「そうじはしてありますか」でも重要な学習項目であったが、ここでは文の接続のしかた、つまり会話の展開のしかたに力点を置いて学習項目としている。発話の起こし、会話を展開していく典型的な例として電話のかけ方がここでは描かれる。

2.2. 構成——場面を中心として

2.2.1. 言語場面、言語表現についての扱い

この映画での場面や言語表現については、以下のとおり扱うことにする。

1. 映画の構成にしたがって、場面を分ける時には、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ……のようにし、それをさらに小場面に分ける時には、Ⅰ-1、Ⅰ-2、Ⅰ-3……のようにする。
2. 言語表現については、文単位で①②……のように通し番号をつける。文の変種を引用する時には、' の印をつけ、①' ②' ……のようにする。変形引用がふたつ以上ある時には、" ' ……の順で' を重ねていく。
3. なお、この映画の中にあらわれていない文や語句を例示する時は、

[] 付きの番号をつけ、その変種の引用には、2.の場合同様'印をつける。文や語句の束で例示する時も出現順に通し番号にする。

以下の言語表現の扱いについては、文単位の認定に多少問題のあるところもあるが、ここでは積極的にはその問題に触れることはしない。なお、①②……の文番号は、使用語彙一覧で引用される文やシナリオ全文でのものと共通である。

2.2.2. 言語場面、言語表現についての解説

この映画の主題は「お見舞い」である。登場人物の一郎と春子は大学の友達である。友人の田中が交通事故で入院したので、一郎は春子に電話をかけたお見舞いに行く相談をする。幸い、田中はたいしたけがではなかった。一郎と春子は、約束の日、花屋でお見舞いの花を買い、タクシーで病院へ行く。「お見舞い」のテーマに即して、依頼・勧誘の言い方を中心に提案・相談・同意・許可・禁止・必要などの言い方がこの映画にもりこまれている。

以上の主題及びストーリーの展開にしたがって、この映画は次の四つの場面から構成されている。

- I 電話口で
- II 花屋で
- III タクシーに乗る
- IV 病院で

上記の場面の中で、IIIは映画構成上のつなぎ場面とでも言うべきものであり、非常に短いシーンである。したがって、この場面をIIかIVに含めれば、映画全体が三つに分割でき、基礎篇の映画5分の枠組みとしては学習のしやすさという点で典型的な構成となっている。場面ごとにそこで提示された学習項目をまとめて指導することも可能だし、場合によっては、場面ごとの独立教材にもなり得るように配慮してある。なお、この映画で取り上げた場面は特殊なものでなく、現代日本社会のどこにでもあり得る一般的な場面であり、日常性に富んだものばかりである。

ここで、この映画の登場人物と主題「お見舞い」について、簡単に触れて

おく。

登場人物は、まず、主役の木村一郎と石田春子が全場面に登場する。年齢は20歳前後、大学の友人という設定であるが、その関係は特に明示していない。田中は、一郎と春子の共通の友人。春子の母、40歳前後。田中の母、40歳前後。この二人は、子供の友人たちとはそれぞれ面識がある。看護婦、20歳前後。職務に忠実な明るい性格の女性である。花屋の女店員、20歳前後。ほかにタクシーの運転手。以上8名が登場人物のすべてである。登場人物のせりふは、対人関係による待遇表現が常に問題となるが、日本語教育映画の基礎編という性格上、この映画では、いままでの各映画と同様に、できるだけ「です・ます」体で通すことにした。そのために、場面の設定も、電話での応答、第三者の同席するやや改まった場合など、「です・ます」体が比較的使いやすい状況を選んだ。

次に、この映画の主題「お見舞い」ということについて説明しておく。「お見舞い」というのは、御機嫌伺いや慰問などのために人を訪れること、一般には、災難にあった人や病気の人などを訪ねて慰めることをさす。「お見舞い」の「お」は、敬意・ていねいを表す接頭語で、見舞うという動作が相手に直接関係する行為なので、普通「お」を付して言うのである。「見舞い」は、動詞「見舞う(見廻う)」の連用形から作られた名詞である。「舞う」は、この場合、舞いを演じるの意味ではなく、「舞いもどる」の用法にみられるように、緊急の場合や異常な状況に接して急ぎ訪れる意味で用いられたものである。「お見舞い」には、「火事見舞い」「病氣見舞い」「暑中見舞い」などの種々の場合があるが、直接先方を訪れる他に、書状などで先方の安否を問うこともある。また「陣中見舞い」という言葉もあるが、これは戦場の軍人を慰問する意である。議員選挙などの折、候補者の選挙事務所などを慰問したりする場合にもこの語が用いられている。「病氣見舞い」などの場合には、花や果物、菓子などを慰問の品として持参することがよく行われる。「お見舞い」という語の用法としては、「お見舞いをする」「お見舞いに行く」のように、動作そのものを直接示す言い方と動作の目的を示す言い方の

他に、「お見舞いを持って行く」のように見舞いの金品を指すこともある。また、「見舞う」という動詞の用法としては、「病気を見舞う」「病人を見舞う」のように事柄を対象とする場合と相手の人を対象とする場合がある。なお、受身表現にして「見舞われる」とすると、「災害に見舞われた」のように、損害・不幸を蒙ったの意となる。病気見舞いなどを受けた立場から言うならば、「お見舞いに来てくださった」とか「お見舞いをしていただいた」などと言わねばならない。この場合、「お見舞いをいただいた」と言えば、「お見舞い」は「お見舞いの金品」の意と解釈されるのが普通である。

以下各場面に即して言語場面、言語表現上の問題点を検討していく。

I 電話口で (①～⑭)

ここでは電話のかけ方を主題に学習を展開することができる。電話での呼び出し、取り次ぎ、用件の伝達、問い返し、提案、相談等、電話でのやりとりが例示される。映画的にはこの映画の主題が提示され、主要な登場人物が紹介される。映画は、一郎が石田家に電話をかけるところから始まる。

I-1 春子を呼んでもらう (①～⑦)

一郎は春子に電話するが、春子の母が電話口に出る。

一郎「①あっ、もしもし、石田さんのお宅ですか。」

春子の母「②はい、石田です。」

一郎「③あっ、お母さんですね。」

④ぼく、木村です。

⑤春子さん、いますか。」

春子の母「⑥ええ、いますよ。」

⑦ちょっと待ってください。」

①は、他家に電話をかける時の言い方。「あっ」、は感情表出のために発せられた感動詞である。ここでは、先方を呼ぶ発信音が途切れ、だれかが受話器を取ったことを知り、自然に発せられたもの。「もしもし」は、相手に呼

びかける時のことば。電話だけでなく、街頭や店などで他人に呼びかける時にも用いられる。「お宅」は先方の住まい、家をていねいに言う表現。相手を指す「あなた」の意味のていねい表現として用いられることもある。先方の住まい、あるいは相手を示す時には、必ず「お」を付ける。「お」を付さない、「宅では、牛乳は飲みません。」「宅は外出中です。」のように、自分の家庭や主人のことを表す。接頭辞「お」については、第十課で簡単な解説をした。①の言い方のヴァリエーションとしては、

①' もしもし、石田様のお宅でございますか。

①'' もしもし、石田さんですか。

などがある。他家でなく、学校・会社・銀行など団体や組織に電話をかける場合には、その機関名を言えばよい。

②は、①に対する応答。肯否要求に対する答えであるから、「はい。」だけでもよいが、電話では間違いを防ぐため、自分の姓を名のるほうがよい。なお、相手から問いかげられる前に、受話器を取ってすぐ②の言い方をしてもよい。ただし、「はい、石田の宅です。」とは言わない。②を言う春子の母の表情は、相手がまだだれであるかわからないので、固く無表情である。電話をかける時には、まず自分の名を名のるのがエチケットであろう。

③の「あっ」は、電話に出たのが春子の母であることをその声により知り、確認表現に先だち自然に発せられたもの。一郎は、春子の母とはかねてから面識がある。この場合、春子の母であることが、声でわかっているので、「春子さんの」と言うことばを付けずに、単に「お母さんですね。」と確認した。

④の「ぼく」は男性が自己を言う時に用いる。「わたし」に比べると、親密さやくだけた感じを与える。「きみ、ぼく」で呼びあう友人同志などの間でよく用いる。「ぼく、木村です。」は、「ぼくは木村です。」の助詞「は」が省略された言い方。くだけた会話では、このような助詞の省略がよくある。これらの学習は、第十二課でも提出してある。なお「ぼくは」を全部略して、「木村です。」だけでも簡潔な言い方として成立する。

⑤の「春子さん」も呼びかけでなく、「は」の略された形である。⑥の「ええ」は、「はい」に比べて、くだけた感じを与える。母の表情にもやわらぎと親密さが見られる。応答詞「はい」と「ええ」については、置き換え可能な場合と不可能な場合があるが、その用法については、日向茂男（1980、「談話における『はい』と『ええ』の機能」『研究報告集—2—』 国立国語研究所）を参照されたい。⑦は、相手に待つことを依頼する場合の典型的な言い方。この言い方のヴァリエーションとしては、

⑦' ちょっとお待ちください。

⑦'' ちょっとお待ちくださいませんか。

などがある。依頼表現については、3.の項で解説する。

ここで小場面は次に移るが、母が受話器を電話台に置くことにより、春子呼びに行ったことが、画面的に理解できる。

I—2 田中の交通事故を知らせる (⑧～⑭)

春子が母と電話をかわり、一郎が用件を述べる。

春子「⑧もしもし、木村さん、こんにちは。」

一郎「⑨あっ、春子さん、実は、田中君が交通事故で——。」

春子「⑩えっ、いつなんですか。」

一郎「⑪きのうなんです。」

春子「⑫それで、ひどいけがなんですか。」

一郎「⑬幸い、たいしたけがではありません。」

春子「⑭ああ、よかった。」

⑧の「もしもし」は、①同様相手に対する呼びかけであるが、ここでは電話に出たことを相手に知らせる意味をもっている。また、「聞こえていますか」「これから話しますよ」などの意味で使われることもよくある。電話では、相手の表情や反応が視覚的にとらえられないためである。⑧の「木村さん」は相手に対する呼びかけではなく、ここでは「木村さんですね」の意味の確認表現である。「木村さん(ノ)」のようにイントネーションが昇調になって

いることに注意。単なる呼びかけならイントネーションは降調になるはずである。また降昇調ならば、意外、期待外という気持ちの表現となる。なお「木村さんですか。」というせりふは、この場合母からすでに相手を知らされているはずだから不自然である。

⑨の「実は」は、まこと・真実の意味でなく、用件の内容をこれから述べようとする時に用いる言葉で、「お伝えしたいことは、ほかでもない、これから述べようとすることなのです」の意である。重要な伝達内容を導くための「発話起こし語句」の一つと言える。「実は、田中君が交通事故で――。」と文が言いきさしになっているが、この表現を完結させれば、「実は、田中君が交通事故でけがをしたのです。」となるはずである。「田中君」の「君」は、一般に、同級生や同僚など親しい友人の間で用いられる敬称である。ふつうは男性が用い、目上に対しては使用しない。なお、「交通事故」というのは、運輸・交通機関の故障や運転の誤りによっておこる脱線・衝突・死傷・破損などの災害を言うが、一般には車輛等の陸上交通事故を指し、海上交通や航空などの場合には、特に、「船舶事故」とか「飛行機事故」などと言うのがふつうである。

⑩の「えっ」は、驚き・意外を示す感動詞。画面では、春子の驚きの表情がアップで描かれている。イントネーションも降昇調である。「なんです」は「なのです」の音韻変化で、くだけた会話ではよく用いられる。「のです」は、話し手が判断の根拠や理由を強調した形で断定したり、説得や説明的口調で表現する場合に用いる。「のです」の用法、指導の方法については第10課で説明した。なお、詳しい分析については、田中望（1979、「日常言語における“説明”について」、『日本語と日本語教育 第8号』、慶応義塾大学国際センター）を参照のこと。

⑫の「それで」は、「交通事故で（指示詞「それ」＋助詞「で」）」の意ではなく、「それで（接続詞）、どうしましたか」の意と解すべきである。

⑬の「幸い」は、不幸・災難にあいそうになったがそれをまぬがれた、あるいは、不幸・災難にあったがその程度で軽くすんで大事に至らなかったの

意で用いる副詞である。「幸いに」「幸いにも」の形でも用いる。「幸運にも」はやや固い感じで文章語的である。また「幸運に」「しあわせに」の語句は、「幸いに」とは異なり、文章全体にかかる陳述副詞としての用法はない。「たいした」は、程度のはなはだしいことを示す連体詞。別格や極端な事例を示して、「たいしたものだ」「たいしたやつだ」などのように肯定表現で用いることもあるが、ふつうは「たいしたことはない」「たいしたけがではない」のように否定表現と呼応して、程度がはなはだしくない場合に用いる。⑭は、前に行われた事柄についての評価を表す言い方。今までの映画にも既出している。ここでは、事態が大事に至らずに済んだことに対する安堵の気持ちを表している。画面でも、春子はにこにこし、安心した表情である。「よかった」を用いて事柄に対する評価を表す言い方には、次の二つの形式がある。

〔1〕 かさを持ってきてよかった。

〔2〕 かさを持ってくればよかった。

〔1〕は、動作の行われた結果に対する評価、〔2〕は、動作の行われなかったことを行われたものと仮定しての評価で、後悔の意味となる。⑭は、「たいしたけがでなくてよかった」の意を、感動詞を先行させて直接表現したものである。感動詞「ああ」は、この映画の場面では、「あーあ」と長めに発音され、安堵の気持ちを適切に表している。なお、⑭のせりふは、話し手の感情が直接表現されたもので、独り言的な言い方になっている。もし、相手に対して述べるならば、

⑭' それはよかったですね。

となる。

I-3 田中の入院した病院名 (⑮～⑰)

一郎は、春子に田中の入院を告げる。

一郎「⑮でも、救急車で辰之川病院に入院しました。」

春子「⑯えっ、もう一度病院の名前を教えてください。」

一郎「⑰辰之川病院です。」

⑮の「でも」は、前件に対し後件が逆説的に示される場合に用いる接続形式である。この映画では、「幸い、たいしたけがでなくてよかった」が前件。それに対し、「病院に入院した」が後件。「完全に安心はできない」の意が言外に含まれている。「救急車」というのは、交通事故や火災などで急ぎの手当てを必要とする傷害者や、あるいは急病人などを運ぶための救急自動車のこと。政令により定められ、消防署などに配置されている。「救急車で」の「で」は、手段・方法を示す格助詞。「辰之川病院」は架空の名称。この映画では、聞き直しの言い方を提示するために、わざと耳なれない名称を用いた。⑯は、聞き直し、問い返しの言い方である。「もう一度」は、次例のように、否定表現と結びつく時には用いず、「もう二度と」と言う。

〔3〕 もう二度と言いません。

⑰の言い方は、伝達上必要な部分のみを表現したもの。「それは辰之川病院です」とか「病院の名前は辰之川病院です」などと言う必要はない。

I-4 お見舞いに誘う (⑱～㉑)

一郎は、いっしょに田中のお見舞いに行こうと春子を誘う。

春子「⑱それで、木村さん、お見舞いに行きましたか。」

一郎「⑲いいえ、あしたの午後行きます。」

⑳春子さんもいっしょにお見舞いに行きませんか。」

春子「㉑ええ、いっしょに行きましょう。」

⑱の「それで」は、前言を受けて話を展開するための順接を表す接続詞。「それでどうした、どうなった」などの意で、相手に話の展開を求める場合にも用いる。「お見舞い」については主題の説明を参照のこと。移動の目的を表す助詞「に」の用法については、第十課で解説した。⑲の「あしたの午後」の「の」は時を限定する連体助詞。単に「午後行きます」なら、限定がないので、ふつうは「きょうの午後」の意と解される。㉑は、相手を誘う言い方。詳しくは3.の項目で述べる。㉒は、勧誘に対する同意・承諾を表す言

い方。この言い方は第九課にも提示してある。

以上で、電話の場面は終わるが、実際の会話では、このあと、待ち合わせ場所・時間など細部にわたる相談が続くはずである。そして、最後に打ち切りや別れの表現があり、電話の応答が完結する。この映画を利用して、「電話のかけ方」というような場面に応じた学習をする場合には、電話での応答がスムーズに要領よく行われていることに留意しながら、この映画で省略した部分も適宜補って活用することが望ましい。

II 花屋で (㉒～㉔)

お見舞いに花を持っていくことは、すでに二人の相談で決まっていることらしい。ここでは、お見舞いの花を選ぶ過程が花屋の店員も加えた三人の会話により示されている。ちゅうちょ、相談、選択、合意に至る様子が人物の動作・表情とともに描かれる。

II-1 花屋の店先で (㉒～㉔)

一郎と春子は、花屋の店先で立ち話をしている。

春子「㉒どのお花にしましょうか。」

一郎「㉓そうですね。」

㉔店の人に相談してみましようか。」

春子「㉕ええ、そうしましよう。」

㉒の「どのお花」は「どれ」と置き換えが可能。「どちら」とは置き換えができない。前者は、多数の中から一つを選択する場合に用い、後者は、二者択一の場合に用いるのが基本的な用法である。今までの映画の中でも、この用法には触れた。「お花」の「お」は、美称語。「お米・お酒・お菓子」などと同様、接頭語「お」を付し対象を美化することにより、上品さ、ていねいさを表す。「～にしましようか」は、相手の意志を問い、相談する言い方。「～しましよう」については、3.の項目で解説する。

㉔は、決定をちゅうちょし、現在考慮中であることを表す。この場合、語

尾をやや伸ばして言うのがふつうである。「そうですね」は、次のようにイントネーションにより、その意味が異なるので発話には注意する必要がある。

(平調) そうですね→ (ちゅうちょ)

(昇調) そうですね↗ (確認・同意を求める)

(降調) (それは) そうですね↘ (同意・納得)

後出する⑳, ㉔, ㉕も、すべてちゅうちょの意である。

㉔の「店の人」を、ややていねいに言う場合には、接頭語「お」を付し「お店の人」と言う。「店員」は、文章語的でやや固い感じがする。「相談する」は、相手を示すのに、助詞「に」または「と」を用いる。「に」を用いると、話し手から相談事を持ち込む、「と」を用いると相互的な話し合いをする、といったニュアンスになる。次例を参照されたい。

〔4〕 友人に／と相談する

〔5〕 友人に／と話す

〔6〕 友人に話しかける

〔7〕 友人と話し合う

「相談してみましょう」は、試みの動作を表す補助用言「～てみる」に「ましょう」が付加された形。「～てみる」は、動詞のあらゆる動作がためしに行われることを示すのが基本的な用法で、ふつう意志動詞に付けられる。㉔の前に「ちょっと」などの語を補うと理解しやすい。㉕は、春子がうなずきながら同意を示して言う。

II-2 店員との相談 (㉔～㉕)

二人は店に入り、お見舞いの花について店員と相談する。

春子「㉔すみません。」

店員「㉕いらっしゃいませ。」

春子「㉔お見舞いには、どんなお花がいいかしら。」

店員「㉕そうですね。」

㉕ こちらのお花なんか、いかがですか。」

㉔は、店で店員などに呼びかける時の言葉。㉕は、客を迎える時のあいさつ語。㉖の「どんな」は、形状・内容を問う疑問詞。㉗の「かしら」は、疑問を表す終助詞で、女性がよく用いる。男性なら「かなあ」となる。一般には、話し手の独り言など、自問の言い方として用いるが、相手に問いかける場合にも使用できる。この場面では、店員に対する問いかけとして用いられている。㉘を言う店員は、伏目になりちょっと考える表情。それから顔を上げ、㉙のせりふを言う。㉚の「こちらのお花なんか」という言い方は、その場にある一例を挙げて、「このような形のこのような色の花ではどうか」の意である。「なんか」は、くだけた会話表現として「など」の代わりに用いられる。「なんか」の用法には、次のようなものがある。

〔8〕 文房具屋では、ノートや万年筆なんかを売っている。

〔9〕 コーヒーなんかいかがですか。

〔10〕 おまえなんかにできるものか。

〔8〕は、「ノート・万年筆」の類の意で、「など」と置き換え可能。〔9〕は、「一例を挙げれば、コーヒーのような飲み物は」の意で、この場合は、「でも」と置き換えが可能である。㉚は、この例である。ただし、第十一課に既出した「㉛コーヒーでも、いれましょうか」の場合は、「なんか」と置き換えがしにくい。次例を参照されたい。

〔9〕' コーヒーでも飲もうか。

〔9〕'' コーヒーなんかいらんよ。

〔10〕は、「おまえのようなやつには」の意で、対象を軽視して扱う用法である。「でも」は、ある範疇から一つを取りあげて例示し、他のものも含む意味であり、軽視・重視は問わないが、「なんか」には、対象を軽く取りあげる、あるいは軽視するといった意味が付加される。

店員の㉚のことばに対しては、実際には、「そうね」とか「うん」とか軽い返事があるはずだが、この映画では省略してある。

II-3 赤い花と白い花 (㉑～㉓)

相談の結果、赤い花と白い花を買うことになる。

春子「㉑どれがいいでしょうか。」

一郎「㉒この赤いのと白いのにしませんか。」

春子「㉓じゃあ、この赤いのを4本と、白いのを3本、ください。」

㉑の春子からの相談に対して、一郎は、手元にある花を指して㉒のせりふを言う。㉒は、決定を表す「～にする」に否定疑問の形「ませんか」を付したもので、最終的な決断を相手の判断にゆだねる態度を示した言い方になっている。「～にしましょう」に比べ、自己主張をやわらげる効果がある。㉒の提案に対してすぐ㉓の応答がなされたのは、言葉のやりとりだけからは唐突な感じもする。㉒の「そうですね」のような考慮を示すことばがあってからのほうが自然であろう。しかしこの画面では、春子は選択決定を自分にゆだねられたものとして言っていることが、その表情から読みとれる。

㉓の「じゃあ」は、「では」の縮約形「じゃ」の語尾が伸ばされたもので、場面や前言を受けて、態度を決定する場合の導き語としての役割をする。㉒の「それじゃあ」も同様である。「3本、4本」の「本」は、鉛筆や電柱など細長いものを数える時の助数詞。この場面でも、細長い茎のついた花を数えるので、この助数詞が使われている。助数詞については、第七課解説を参照のこと。数量を示す語は、ふつう「白いのを3本ください」のように、連用修飾語として用いられ、「3本の白いのをください」とは、言わない。数量詞の副詞的用法に留意して指導する必要がある。

II-4 黄色い花を追加する (㉔～㉖)

春子の注文に応じて、店員は花をそろえてくれる。二人はちょっと少ないと思い、花を追加することにする。

店員「㉔これでいかがですか。」

一郎「㉕そうですねー。」

㉖ちょっと少ないかな。」

春子「⑳それじゃあ、あの黄色いお花も入れてみましょうか。」

一郎「㉑そうですね。」

㉒「あの花も6本、ください。」

店員「㉓はい。」

㉔「黄色いのも6本、入れておきます。」

一郎「㉕ええ、そうしてください。」

㉖の「これで」の「で」は、限度・範囲・範疇を表す用法である。店員は手に花を取って、一束にしながらか「これで」と言っている。㉗「いかがですか」は、状態・評価などを問う言い方。勧めの意味で用いられることもある。㉘の「どうですか」に比べて、ていねいでやや改まった感じを与える。画面で店員が示した花束は量が少ない。そこで、一郎の㉙、㉚のせりふとなる。㉙の言い方は、㉓、㉔と同様である。㉚の「かな」は、画面の実際の表現では「かなあ」と語尾を伸ばしている。独白的に疑問を投げる言い方である。㉓では、女性の用いた「かしら」が提出してある。その項および㉔の説明を参照のこと。

㉗は、「それでは」の縮約形「それじゃ」の語尾を伸ばした言い方、一郎の㉘の判断を受けて、「少ないなら、それでは」の気持ちを表したもの。「入れる」は、ここでは、「加える」の意で、「仲間に入れる」「数に入れる」などのように、ある限定された集団の構成に参加させるの意味である。「黄色い」は「黄色の」とも言う。色に関する形容詞については、3.の項目で解説する。「～てみましょうか」は、試みの動作を行うことを相手に問う言い方。問いかける言い方で表現することにより、意志の伝達が強制的でなくやわらげられる効果がある。

㉘は、同意を示す言い方。一郎は春子のほうに顔を向け同意の表情を浮かべている。イントネーションについては、㉓、㉔を参照のこと。㉙で一郎は独断的に本数まで決めてしまっているが、㉗に対して、春子との相談が何か一言あってもよい。㉚の「～ておく」の用法については、第十二課で解説した。ここでの意味は、「対象の位置を変化させ、その結果の状態を持続させ

る」(吉川武時, 1976, 「現代日本語動詞のアスペクト」)に相当する。㉔の「ええ」は、一郎がうなずきながら言う。「そうして」は、店員のことは「黄色いのも6本、入れておき」を指示語「そう」で受けたもの。

II-5 お見舞いの花が決まる (㉓~㉔)

店員は追加注文の花も加え、二人に見せる。これでお見舞いの花が決まった。

店員「㉓どうですか。」

春子「㉔とてもきれいですね。」

㉓は店員が首をかしげ、評価を問う表情で言う。㉔は春子が一郎と顔を見合せて、一郎の評価も確かめながら言う。画面からは一郎も同じ評価を与えていることがわかる。「とても」は、程度・量のはなはだしいことを示す副詞。「非常に」「たいへん」と置き換えが可能。会話表現でよく用いる。

III タクシーに乗る (㉕~㉖)

一郎と春子は、街頭でタクシーを止める。この場面は、映画としては、病院へ二人が向かったことを示すため、場面IIからIVへのつなぎの役目を果たしている。

一郎「㉕すみません。」

㉖辰之川病院まで行ってください。」

㉕は、相手に何かを問いかけたり、依頼したりする場合の呼びかけとして用いられている。相手をわずらわすことに対する気持ちの表れで、過失をわびる意ではない。「あのう…」など発話を起こす語を用いることもできる。

㉖は、「辰之川病院までお願いします」という言い方に置き換えることもできる。簡潔な言い方としては、「辰之川病院まで」でもよい。運転手は、了解の意味で「はい」と応じているが、小声なので聞きとりにくい。二人はタクシーに乗り込む。自動ドアが閉まり、タクシーは走り去る。

IV 病院で (④⑦～④⑨)

ここでは、お見舞いという行為の全体経過が描かれる。患者との面会・対話、看護婦との応待、見舞い客に対する接待等の様子を示しながら、学習項目としては依頼表現の他に許可、不許可等に関する言い方が提示される。

IV-1 病室の前で (④⑦～④⑩)

二人は病室の前まで来て、ドアをノックする。ノックに答えて、田中の母が顔を出す。

田中の母「④⑦はい。」

田中の母「④⑧あら、一郎さん、春子さん。」

二人「④⑨こんにちは。」

田中の母「④⑩さあ、どうぞ。」

二人「④⑩はい。」

④⑦は、ノックの音に対する応答。この場合、「ええ」とか「うん」という返事は不可。田中の母がドアを開け、顔を出す。④⑧は、二人を認めて発したことば。「あら」は、驚き・意外・発見などの感情を直接表す感動詞。女性が用いる。「まあ」「あらまあ」などとも言う。男性なら「あ」とか、親しい友人間では④⑨、④⑩の「やあ」などを用いる。田中の母がここで、相手の姓を言わず名を言っているのは、二人とかなり親しい関係にあることを示している。

IV-2 田中に面会して (④⑫～④⑭)

田中の母のことばに促されて病室に入った二人は、ベッドに寝ている田中と顔を合わせる。

春子「④⑫こんにちは。」

田中「④⑬やあ。」

一郎「④⑭やあ。」

田中「④⑮お母さん、ちょっと起こしてください。」

春子「⑤⑥どうぞ寝ていてください。」

田中「⑤⑦ええ、もう大丈夫です。」

田中の母「⑤⑧ちょっと失礼します。」

⑤③, ⑤④は、親しい友人などと出合った時、相手を認めたことにより発せられる感動詞。男性が用いる。⑤⑤は、自力で起き上がれない田中が、母の援助を依頼するために発したもの。「起こす」は、自動詞「起きる」に対応する他動詞。「起きてください」は、相手が動作を行うことに対する依頼。「起こしてください」は、自分の動作に対する援助を依頼する場合と、第三者の動作について相手に依頼する場合がある。詳しくは3.の項目を参照のこと。⑤⑥は、病人をいたわるために言ったことば。「そのまま」ということばを補うと、状態を変えないという意味がはっきりする。

⑤⑦は、見舞い客に対し心配・懸念の必要がないことを表したもの。「大丈夫」は、非常にしっかりしている様子を表す形容動詞。ここでは、「心配ない、懸念の必要がない」の意で、傷害が回復していることを示す。第六課では、「⑤⑦ あっ、あぶない。」「⑤⑧ だいじょうぶ?」「⑤⑨ うん、だいじょうぶ。」の言い方で提出してある。⑤⑧の「失礼します」は、母が病室を出て行く時、見舞い客の前を通りながら言う。画面からは、客の前を通る非礼をわびる意で言ったものと思われるが、途中で席をはずすことをわびて言ったものとも考えられる。田中の母は、見舞い客である一郎と春子をもてなす準備をするため席をはずし、病室を出た。なお、⑤⑨に後出する「失礼します」は、別れのあいさつである。⑤⑧では、「ちょっと」、⑤⑦では、「じゃあ」という語が前に付けられていることに注意すること。

IV-3 お見舞いの花を渡す (⑤⑨~⑤⑫)

春子は二人を代表して、お見舞いの花を差し出す。

春子「⑤⑨これ、お見舞いの……」

田中「⑤⑩どうもありがとう。」

⑤⑪すみませんが、その台の上に置いてください。」

田中「⑥あっ、その本は、ベッドの上に置いてください。」

⑤の「これ」は、「この花」を指す代名詞。「お見舞いの……」まで春子が言っていて、あとを言おうとした時、田中がすぐ⑥のことばを挿入したので、言いさしの形になっている。「……」の部分には、「花です」「気持ちです」などのことばが続くはずである。とすれば、「これ」は、助詞「は」の省略された提題と考えられる。

⑥の「すみませんが」は、相手に何かを依頼したり、問いかけたりする場合に用いる。発話の内容を導くための前置き語である。⑥、⑦は、自ら動作のできない者が、他人に動作を依頼するために言ったことばである。

IV-4 看護婦が来て(1) (⑧~⑩)

看護婦が田中の検温のため病室に入って来る。

看護婦「⑧はい、体温を計って。」

⑨気分は、どうですか。」

田中「⑩とてもいいです。」

⑪もう歩いてもいいですか。」

看護婦「⑫いいえ、まだ歩いてはいけません。」

⑬薬は、飲みましたか。」

田中「⑭あっ、いけない。」

看護婦「⑮薬は、かならず飲まなければいけませんよ。」

田中「⑯はい。」

⑮は、看護婦が体温計を渡しながら言う。応答の「はい」ではなく、物を渡す時などに相手の注意を喚起するために発する合図の意味である。一般に談話の流れにおける先行発言の「はい」は、注意喚起、合図、指示などの意であり、相手の呼びかけ、質問、命令、依頼などに対し答える後行発言の「はい」は、返事、了解の意味の応答である。⑯の「はい」は応答、⑮、⑰、⑱の「はい」は、注意喚起である。「体温を計って」の言い方は、「～て」の形を用いた依頼、あるいは命令の表現。ここでは「計りなさい」の意

味であり、命令表現を柔らげて言ったもの。患者が言えば依頼、看護婦が言えば命令の意となる。なお、温度を計る器具には、体温計と寒暖計の別がある。

④の「気分」は、ある時点における人間の心持ち、感情状態をいう。病人などにその気持ちを問う時には、④の言い方をし、肉体的な病状を問う時には、「具合はいかがですか」などと言う。なお、「気分」という語は「気持ち」という語と近い意味を持つが、文脈によって置き換えられない場合もある。例えば、乗り物酔いなどの場合には、「気分が悪い」「気持ちが悪い」と言えるが、この映画の場面では「気持ちはどうですか」とは言わない。また、形状の異様な物体を見た時など、感覚的、精神的な恐怖を覚えた場合には、「気味が悪い」と言う。

⑥は、許可を求める言い方。⑦は、不許可・禁止の意を表す言い方。看護婦は、「歩いては」でやや語尾を上げ強めて発言しているが、これは「他の動作はともかく歩くことに関しては」の意を表したもの。「は」による事柄のとりたてを音声的に表出したものと言える。⑥の「もう」は、一定の時間的経過があって、すでに動作の実現が可能と判断される時、⑦の「まだ」は、それに対し、実現が不可と判断される時に用いる。「もう」と「まだ」は、話し手の意識中にある一定の規準を越すか越さないかの判断によって、その用法が異なる。文末表現との形式的な対応のみでは意味の理解が正しく行われなことがあるので、適切な文脈によって示すことが必要である。例えば、人と一時に会う約束をした場合を仮定した次例を考えてみよう。

[11] 彼はもう来ない。

[12] 彼はもう来る。

[13] 彼はまだ来ない。

[14] 彼はまだ来る。

話し手の意識の規準が一時であるとした場合、[11]は、規準を越えた時点で「もはや」の意である。[12]は、規準を越えない時点で「間もなく」の意である。[13]は、規準を越えた時点で「来るはずなのに」の意となり、規準

を越えない時点では、「実現までに、間がある」の意となる。〔14〕は、規準を越えない時点で、あるいは、規準を訂正して、「実現する可能性がある」の意となる。「もう」と「まだ」については、森田良行（1977、『基礎日本語』、角川書店）に詳しい説明がある。

⑥は、話し手が過失に気づいた時の言い方。独白的表現で薬を飲むことを忘れた意を表している。看護婦の問いに答えるなら、このあとに「飲むのを忘れました」というようなことばが続くはずである。⑦の「薬は」の「は」は、「薬を飲む」の「薬を」をとりたてて文頭に表示した提題的用法。⑧の「薬は」も同様である。なお、薬は錠剤でも粉末でも溶液でも、経口剤の場合には、「飲む」を用いる。タイ語やインドネシア語などのように、薬剤の形態により「食べる」を用いることばもあるので注意すること。「～しなければいけません」は、必要、当然、義務などの意を表す言い方。3.の項で説明する。

IV-5 看護婦が来て（2）（⑦～⑩）

看護婦が田中に薬を与え、検温をする。

看護婦「⑦はい。」

看護婦「⑧はい。」

看護婦「⑨体温計を見せて。」

看護婦「⑩あっ、気をつけてください。」

田中「⑪すみません。」

⑦はい。」

看護婦「⑩まだ寝ていなくてはいけませんよ。」

⑦は、看護婦が田中に薬を渡しながら言う。⑧は、コップを渡しながら言う。いずれも⑥同様、注意喚起の意である。⑨は、⑥と同様「～て」の形を用いた要求で、命令的表現である。田中が体温計を取り落すのを見て、⑩のことばを看護婦が言う。「気をつける」は、「注意する」「気を配る」の意で、対象には助詞「に」を付す。ここでは、「落とさないように注意する」の意。

看護婦のことは、患者をいたわる気持ちから「～てください」を用いた依頼表現になっているが、意図するところは「気をつけなさい」の命令的意図であろう。強く言うなら「気をつけなければいけません」「だめじゃない」などと叱責的な言い方になる。「見せてください」は、他動詞「見せる」に「ください」を付けた形。使役形を用いれば、「見させてください」となるが、単に見ることのみを要求する場合には、他動詞から依頼表現を作るのがふつうである。

⑯は、過失をわびる言い方。⑰は、田中が看護婦に体温計を渡しながら言う。⑱、⑲同様、注意喚起の意である。⑳は、寝ている状態を継続させること、つまり、「起きたり、歩いたりしてはいけない」の意である。「～なくてはいけません」は二重否定の形により、積極的に動作を行う、あるいは状態を継続することを義務づける言い方である。

IV-6 紅茶とケーキ (1) (㉗～㉘)

看護婦が去り、田中の母が紅茶とケーキを持って入ってくる。

田中の母「㉗一郎さん、その灰皿を下に置いてくださいませんか。」

一郎「㉘はい。」

㉗の「灰皿」は、たばこの灰を入れる皿で、一語として「ハイザラ」のように連濁になる。「小皿」「大皿」「ケーキ皿」などすべて発音は連濁になる。「～していただきませんか」は、ていちょうな依頼表現。

IV-7 紅茶とケーキ (2) (㉙～㉚)

田中の母は、二人に紅茶とケーキを渡し、遠慮なくとすすめる。

田中の母「㉙はい。」

田中の母「㉚はい。」

田中の母「㉛はい。」

田中の母「㉜春子さん、すみませんが、お砂糖入れを取っていただきませんか。」

春子「㉔はい。」

田中の母「㉕どうぞ。」

一郎「㉖どうも。」

春子「㉗すみません。」

㉑は、春子へケーキを渡しながらか、㉒は、一郎へ渡しながらか言う。㉓、㉔、㉕と同様、注意喚起の意である。「お砂糖入れ」は「砂糖を入れるもの」のことで、動詞の連用形から派生した名詞の形。「はたく→はたき」「はさむ→はさみ」「かさをたてる→かさたて」なども同様である。動詞連用形から作られる名詞の形は物を示すだけでなく、その動詞の有する意味から次のように、事、人、所などを示すこともある。

早く起きる→早起き（早く起きること）

英国から帰る→英国帰り（英国から帰った人）

通る→通り（人・車の通るところ）

「お砂糖入れ」の「お」は、㉒の「お花」と同様、上品さやいねいさを示す接頭語。「取る」は、ここでは、話し手の方へ物を手渡す、近づけるの意であり、「こらちへ」というような語を補うとわかりやすい。㉔は、㉓に対する応答。㉕は、相手にもものを勧める時の言い方。ここでは、「めしあがってください」の意。㉖は、謝意を表す。「ありがとうございます」の意。㉗も、わびではなく感謝の意。相手に手数をかけさせたことを済まなく思う気持ちから発したものの。

画面は、ここで、お見舞いに持参したカーネーションの花が大写しになり、フォーカス・アウトの手法で時間の経過があったことを示す。

IV-8 退室のあいさつ（㉘～㉙）

二人はそろそろ退室しようと思ひ、病人である田中をはげますことばをかける。

一郎「㉘そろそろ、失礼します。」

田中「㉙そうですか。」

一郎「㉔早くよくなってください。」

田中「㉕ええ、あまり心配しないでください。」

春子「㉖早く、元気になってください。」

田中「㉗ええ。」

㉔は、一郎が腕時計を見ながら言う。「そろそろ」の用法は、第十課「㉑さあ、そろそろ帰りましょう。」の項を参照のこと。名残りを惜しむ気持ちだが、「そろそろ」の語を少し伸ばすように発話しているところにも示されている。㉕は、それに対し「もう帰ってしまうんですか。残念ですね。」という気持ちを込めて、上昇調のイントネーションで発話されている。納得、了承的に言う「そうですか」との違いに十分注意すること。

画面では、テーマ音楽が静かに流れ、別れの時間が近づいたことを暗示している。㉔は、㉖とほぼ同意で、傷害がなおり、健康を回復することを希望し、祈る気持ちを、依頼表現の形で表したもの。「私は、あなたの体の回復を希望します」などとは言わない。㉕の「あまり」は、程度を示す副詞。肯定表現で用いられる場合と、否定表現で用いられる場合で、意味・用法が異なる。肯定表現では、「あまり大きすぎる」のように過度の意で用いるが、否定表現と呼応して用いる場合には、「あまり大きくない」のように、一定の規準に比し、その程度が低い意であり、「それほど」「そんなに」との置き換えが可能である。

IV-9 別れのあいさつ (㉘～㉚)

いよいよ別れのあいさつとなる。

田中の母「㉘きょうは、どうもありがとうございました。」

田中「㉙きょうは、ありがとう。」

二人「㉚おだいじに。」

田中の母「㉛じゃ、失礼します。」

㉘、㉙は、感謝の意を述べる言い方。改まった場で正式のあいさつを申し述べるような場合なら、「きょうは、(わざわざお見舞いくださいまして)ど

うもありがとうございました」となるであろう。普通の日常的あいさつでは、()内のことばは、取りたてて言う必要がない。母の謝意に対し、二人は軽く一礼する。「どういたしまして」の気持ちが態度によって示されている。㉞は、病人や、旅行に出る人などに対して、その健康を気づかい無事を祈る気持ちで言う別れのあいさつ。「お体をお大事にしてください」の意である。㉟は、別れのあいさつ語として用いられている。田中の母は、頭を下げながら言う。㊸および第十課㊹を参照のこと。二人は、田中の母に対し、ていねいに一礼する。田中の母も軽く一礼しながら二人を見送る。

3. この映画の学習項目の整理と練習問題

2.2. では、この映画の各場面に即して言語表現上の問題や、そこでの映像の役割りについて述べた。ここでは、主要学習項目である依頼表現・勧誘表現の用法、関連学習項目としての許可・禁止・必要・義務などの言い方、およびその他若干の語句・語法についての簡単な解説をする。

3.1. 主要学習項目

3.1.1. 依頼表現・勧誘表現について

依頼や勧誘の意を示す表現は、話し手の表現意図から考えれば、相手に対して何らかの働きかけを表すもの、つまり要求表現の一種である。この表現は、相手に何らかの行動を要求し、その実現を期待するところに特徴がある。したがって、相手に対する希望・欲求を示す表現や命令表現、あるいは受給表現などとも密接な関係がある。

依頼や勧誘を示す表現は、言語活動を行う状況により、いろいろな形式で実現される。例えば、相手に「窓をあけること」を要求する言語表現にはどんな形式があるか、そのパターンを列挙してみよう。

- (1) 窓をあける。
- (2) 窓をおあけ。

- (3) 窓を(お)あけなさい。
- (4) 窓をあけたまえ。
- (5) 窓をあけてごらん(なさい)。
- (6) 窓をあけて。
- (7) 窓をあけてちょうだい。
- (8) 窓をあけて(お)くれ。
- (9) 窓をあけてくれないか／くれない?／くれたまえ／くれないだろう
か／くれないでしょうか／くれませんか／くれませんかでしょうか。
- (10) 窓をあけてください(ませ・まし)。
／くださいませんか／くださいませんかでしょうか。
- (11) 窓をあけてもらいたい。
／もらえないか／もらえない?／もらえないだろうか／もらえない
でしょうか／もらえませんか／もらえませんかでしょうか。
- (12) 窓をあけていただきたい。
／いただけないか／いただけない?／いただけないであろうか／い
ただけないでしょうか／いただけませんか／いただけませんでしょ
うか。
- (13) 窓をおあげ願います。／願いたい。
- (14) 窓をあけられたい。
- (15) 窓をあけよう。／あげましょう。
- (16) 窓をあけるようにしよう。／しましょう。
- (17) 窓をあけないか。／あけない?／あけませんか／あけませんか?
- (18) 窓をあけてみないか。／みない?／みませんか／みませんか?
- (19) 窓をあけようじゃないか。／ではないか。
- (20) 窓をあけたら。
- (21) 窓をあけては(たら)どう。(どうか／どうだい)

以上主な言い方を列挙してみたが、ここに挙げただけでも21種54型ものパ
ターンがある。さらに「窓をあけないこと」を要求する言い方を考えれば、

その形式は非常に多くなるはずである。そして実際の表現では、それぞれの言い方にイントネーションや文末助詞などが加わるだろうし、身ぶりなどの行動様式も付随することになるだろう。このように、相手に何らかの行動を要求する表現には、多様な言い方があり、使役表現や待遇表現などとの関連も無視できない。この映画では、初めに述べたように、種々の表現形式から、依頼・勧誘の意を表す基本的なもの6種のみを取り上げ、場面と共に提示した。

3.1.2. 依頼表現「ください」について

「ください」は、『日本国語大辞典』（1973, 小学館）によれば、“五(四)段活用動詞「くださる」の命令形「くだされ」の変化したもの。一説に、「くださいまし(ませ)」の略ともいう。現在、標準語では、この形が、「くださる」の命令、要求表現として用いられる”とある。

用法としては、「名詞+を+ください」の形で事物の授受を依頼する用法と、「動詞+てください」の形で、動作を行うことを依頼する補助用言としての用法がある。この映画で提示した③③, ③④は前者の用法, ⑦, ⑬, ⑭, ⑯などは後者の用法である。

次に、「～てください」の形がどのような動詞に接続するかについて触れておく。

(勉強を)する, 作る, 話す, くりかえす, 読む, 喜ぶ, 売る, 願う, 教える, 愛する, 歩く, 働く, 行く, 会う, (医者に)なる, 居る, 来る

など, 人間の意志によって左右できる事柄を表す動詞には付けることができる。しかし,

(音が)する, 大きすぎる, 思われる, 読める, 要る, 痛む, そびえる, (太陽が)現れる, 光る, 違う, 見える, 煮える, (朝に)なる, ある

など, 人間の意志によって左右できない事柄を表す動詞には, 一般に付けにくい。たとえば存在を表す動詞でも, 「ここにいてください」のように意志

動詞「いる」には付けられるが、無意志動詞「ある」の場合には、「ここにあってください」とは言えない。これは、命令表現の場合も同様で、一般に、状態性の強い意味を有する動詞とは結びつきにくい。もし、これらの動詞に付けた場合には、

〔15〕 お日様、もっと光ってください。

〔16〕 早く朝になってください。

のように、擬人化された言い方になり、祈願の意味を表すことになる。

また、可能の意を表す動詞に付ける場合には、「読めてください」とは言わず、

〔17〕 読めるようになってください。

〔18〕 読めるようにしてください。

のように、「～ようになる」「～ようにする」という形を挿入し、状態の変化や、その実現を求める意味で用いる。なお、㊦の「早くよくなってください」の場合も、人間の意志によって左右できにくい事柄かもしれないが、状態の変化を祈願する意味で用いられたものである。

知覚・理解の意味を表す動詞に付く場合には、「知ってください」とは言えないが、「わかってください」は言える。「知る」という動詞は、人間の知覚を表すものであり、「見える」「聞こえる」などと同様、自然にそうなるという感覚的な意味合いが強いためであろう。努力して意志的に知る場合には、「私の名前を知ってください」などとは言わず、「覚える」を用いて、「私の名前を覚えてください」のように言うほうがふつうである。これに対して、「わかる」は、「理解する」の意味で、「私の立場もわかってください」のように用いることができる。しかし、「この数学の問題がわかってください」の場合は、落ち着いた悪い表現であり、「この数学の問題がわかるようになってください」と言うほうが自然である。「忘れる」という動詞の場合にも、意識的に忘れるのかどうかによって、「～てください」が付けられる場合と付けられない場合がある。

〔19〕 私のことは忘れてください。

[20] うっかり (つい), 忘れてください。

[19]は言えるが, [20]は言えない。ただし, 否定表現の場合には,

[21] うっかり忘れないでください。

のように用いることができる。「忘れない」という事は, 「覚えている」ということで, やはり意識的な努力によるところが大きいからであろう。

「～してください」の形で, ある動作を行うことを要求する場合, その動詞の有する意味を直接行う者がだれであるかによって, どのような種類の動詞を用いるかが規定される。例えば,

A 話し相手自身の動作を要求する場合

[22] 早く寝てください。(話し相手が「寝る」ことを行う)

B 第三者の動作を要求する場合

[23] (子供を) 早く寝かせてください。(子供が「寝る」ことを行う)

C 話し手自身の動作を要求する場合

[24] (私を) 早く寝かせてください。(話し手自身が「寝る」ことを行う)

Aの場合には,

寝る, 起きる, 歩く, 読む, 食べる, (勉強を) する

など, 自動詞・他動詞の別を問わない。

BとCの場合には,

寝かす, 寝かせる, 起こす, 起きさせる, 歩かす, 歩かせる, 読ます, 読ませる, 食べさす, 食べさせる, (勉強を) させる

など, 他動詞, あるいは動詞の使役態を用いる。Cの場合は, 「私にも言わせてください」「私にも歌わせてください」などのように, 話し手自身が行動することを相手に命じてもらうという言い方で, 話し手の希望・欲求を依頼表現の形式により示すものと, ㊦の「お母さん, ちょっと起こしてください」のように援助を相手に求める言い方とがある。

事物の譲渡・移動を依頼する言い方には,

[25] お金を貸してください。

[26] お金を借りてください。

のような言い方がある。[25]は、話し相手が貸し方で、話し手または第三者が借り方である。[26]は、話し手または第三者が貸し方で話し相手が借り方の場合と、話し手自身が借り方でその援助を相手に求める場合とがある。貸し方、あるいは借り方が話し相手であるか話し手自身であるか第三者であるかは、場面、文脈によって知ることができるが、言語表現によって明確に示したい場合には、授受動詞や対象、あるいは出自を示す助詞を付して、

[25]' (彼に) お金を貸してあげてください。

[25]'' (私に) お金を貸してください。

[26]' (彼から) お金を借りてください。

[26]'' (私から) お金を借りてください。

[26]''' (私のために) お金を借りてください。

などのように言う。事物の移動を出発点に視点を置いてとらえるか、帰着点に視点を置いてとらえるかによって表現が異なるためである。このような動詞には、

売る・買う、渡す・受け取る、教える・教わる(習う)、やる、もらうなどがある。

「～していただけますか」の言い方は、否定疑問の形を用いることにより相手の意志・立場を考慮する意味の表現となり、「～してください」に比し、よりのいねい度の高い依頼表現であると言えよう。「～してください」が話し手の一方的な依頼なのに対し、「～していただけますか」は、相手の行動を、相手自身の選択にまかせる余地を残しているからである。表現のいねい度については、野元菊雄(1978, 「敬語の段階」, 『日本語教育』35号)と、同「ていねいさの順位」(『国語学115』)を参照されたい。

相手に動作を行わないことを依頼する場合には、「～しないでください」の形を用いる。この場合、「～しなくてください」とは言えない。ただし、必要・義務などを表す「～しなくてはいけない」の言い方では、「～しないで」の形は使わない。「なくて」の形は、動詞にも形容詞にも接続するが、「ない

で」の形は動詞にのみ接続する。また、音声的には、「～ないでください」は連続的に発話するが、「～なくてはいけません」の言い方は、㉞の「まだ歩いてはいけません」の例をとると「歩いては、いけません」のように区切って発話することもできる。

3.1.3. 勧誘表現「～しませんか」と「～しましょう」について

この映画では、勧誘の意を表す言い方の基本的な形として上記の二つの形が提示してある。

「～しませんか」は、否定疑問の形で相手の意志を問うことにより、誘いの意を表す言い方となる。相手自身の選択に行動をゆだねるという意味が含まれるので、提案の意味で用いられることが多い。これに対し、「～しましょう」の形は、話し手が自分の意志を相手に投げかけることにより誘いの意を表す言い方で、積極的な勧誘を示す。

三尾砂は、「ましょう」を、(1)推量、(2)自分の意向、(3)勧誘、の三つの用法に分け、日常生活の話しことばの世界では、そのほとんどの場合が、(2)と(3)の表現であるとしている。

「しましょう」は「しよう」よりていねいな言い方であるが、「しよう」の代わりに「しよう」を用いると用法の異なる場合がある。例えば、㉞の「どのお花にしましょうか」の場合は、相手に対する問いかけ・相談の意を表すのであるが、これを「どの花にしようか」と言えば、㉞と同様、相談の意味で用いられる場合と、「どの花にしようかなあ」の意で、自分自身に対する問いかけ・独り言として用いられる場合とがある。助動詞「う・よう」は、本来、話し手の意志や推量の意を表すものであるが、話し相手に対して用いた場合には、相手に対する勧誘を表すことになる。特に、そのていねい体「ましょう」は、もっぱら勧誘の意味を表すのに用いられ、疑問の助動詞「か」を付せば、相談、提案の意で用いられる。また、相手の勧誘に対する承諾の返事としても用いられる。なお、「しましょう」を用いた場合は、話し手自身も行動を共にするという意味である。たとえば、

[27] さあ、行きましょう。

[27]' さあ、参りましょう。

[28] さあ、食べましょう。

[28]' さあ、いただきましょう。

などは言えるが、

[27]'' さあ、いらっしゃいましょう。

[28]'' さあ、めしあがりましょう。

などとは言えない。「いらっしゃる」「めしあがる」などは、尊敬語であり、話し手自身の動作については使えないためである。

「ましょう」の用法として、積極的な勧誘の意味から、勧告・命令に近い意味で、子供などに「よく勉強しましょう」とか「木の枝を折らないようにしましょう」などと用いることもある。

3.1.4. 依頼表現と呼応する副詞

依頼表現と呼応して用いられる副詞には、代表的なものに「どうぞ」と「どうか」がある。「どうぞ」は、一般に、相手の意向を尊重して依頼するといった立場で用いるのが普通で、「どうか」は、話し手の意向を強く相手に求める、懇願するという立場で用いられる。たとえば乞食などが喜捨を求める場合などには、

[29] どうか、お金を恵んでください。

のように、「どうぞ」より「どうか」のほうがびったりする。神に対する祈願でも、「どうか、子供をさずけてください」などと用いる。フランス語の「s'il vous plaît (どうぞ。もし、あなたがお気に召すなら、の意)」と「je vous prie (どうか。私はあなたに望む、の意)」に対比されるものであろう。また、「どうぞ」は、それだけで独立して用いることができるが、「どうか」にはその用法がない。依頼表現と結びつく副詞としては、この他に「ぜひ」「ぜひとも」「ひとつ」などがある。「どうぞ」「どうか」は依頼表現にのみ結び付くが、これらは、勧誘表現や希望表現とも結び付く。

3.1.5. 依頼表現を導くための前置き語句

依頼表現を何の前提もなく発話すると唐突な感じを相手に与えることがあ

る。それをさけるために依頼の内容を導くために、「すみませんが」「恐れ入りますが」「申しわけありませんが」「お手数ですが」「さっそくですが」などの前置き語句がよく用いられる。これらの前提を導入部に用いることにより、話し手の依頼態度やていねいさが示されることになる。

「お願いします」は、次例のように、前提語として呼びかけの意味で用いられる場合もあるし、依頼内容を含んだ意味で用いられる場合もある。また、事物の譲渡を依頼する「ください」と同様の用い方もある。

[30] お願いします。

はい、何ですか。

コーヒーをください。

[31] コーヒーをお願いします。

[32] コーヒーを持ってきてください。お願いします。

[33] (選挙の投票依頼などで) ○○党です。お願いします。

3.1.6. 相手に対する呼びかけ

依頼や勧誘表現では、相手の注意を喚起したり、相手を特定したりする意味で、相手に対する呼びかけから発話が始まることがよくある。ふつうは、敬称「～さん」「～君」などを相手の氏名に付して次のように呼びかける。

[34] 山田さん、へやに入ってください。

ただし、次例のように助詞「は」を付した場合には、呼びかけではなく相手を他の者と区別し取りたてて限定する意味になる。

[35] 山田さんは、へやに入ってください。

なお、「山田さんは、へやに入ってくださいます」は、依頼表現ではなく、待遇表現に用いる補助動詞「くださる」の連用形で別用法である。

呼びかけ語としては、一般に「もしもし」などがよく用いられるが、㉔、㉕、㉖などで提示したように、注意喚起の意味で、「はい」などが用いられることもある。

3.2. その他の学習項目

3.2.1. 許可, 不許可, 必要, 義務, 当然などの意を表す言い方

許可, 許容を表す基本的な形式としては、「～してもいい」「～してもかまわない」の言い方がある。この言い方は、動詞の連用形+接続助詞「ても」+「いい(かまわない)」の形で作られる。「いい」と「かまわない」は、語感として前者により積極的な態度が認められることがあるとされるが、これは、その形態から見て、前者が積極的な評価を表す形容詞であり、後者が「支障がない」という意味の動詞否定形による表現であることによるものと思われる。どちらの形式を用いるかは、場面に応じた話し手の心理的な態度による。

「～してはいけない」の言い方は、不許可, 禁止(打消の命令)の意味で用いられる。「そうすることは好ましくない, 認めがたい」の意で用いる場合と、積極的に相手の行為を禁ずる意図で用いる場合がある。また、話し相手に対する個別的な事柄に関する不許可, 禁止の意味だけでなく、

[36] 我々はうそをついてはいけない。

のように一般的な事柄について、義務や責任としてそうするのが当然の意味で用いられることもある。この意味では、

[37] 我々はうそをついてはならない。

のように「～てはならない」の形を用いることが多い。「～しなければいけない」の言い方も、ある行為の必要, 義務, 当然の意を表すものである。一般的な事柄について、回避できないことを言う場合には、「～しなければならぬ」の形をとることが多い。どの形式を用いるかは、場面・文脈に応じた話し手の心理的態度に負うところが多いが、次例のように一般的な事柄を他に選択の余地がないものとして言う場合には、「～てはいけない」は用いられない。

[38] 人間は一度は死ななければならぬ。

この場合、人間が死ぬのは、必然のことであり、他に方法がないからであ

る。また、規則や条文などで遵守すべき事柄を述べる場合にも、「～しなければならない」の形式を用いる。

「～しなければならない」の語句を分けると、動詞「する」の未然形+助動詞「ない」の仮定形+接続助詞「ば」+動詞「なる」の未然形+助動詞「ない」というように分析されるが、このような表現は、一続きの連語として分割せずに扱うのがよい。なお、二重否定による表現は、そのことを強めて言う場合と、反対に、弱めて婉曲的に言う場合とがあるので留意する必要がある。

3.2.2. 格助詞「で」の用法について

これまでの映画基礎編では、格助詞「で」の用法が種々の場面で提示された。ここで「で」の用法をまとめておく。文中で「で」の形をとる語には、(1)格助詞、(2)接続助詞「て」が音便により「で」となったもの、(3)助動詞「だ」の連用形などがあるが、ここでは、格助詞に関するもののみを扱う。

格助詞「で」は、文語の「にて」から生じたと考えられている。格助詞「で」は、体言または体言相当語に接続するが、その基本的な意味は、“動作・作用の主体・客体・変化移動の目標といったような直接的中心的役割でなくて、動作・作用の行われる時・所・場面・手段・原因・立場など間接的背景的役割の表現である”（木之下正雄，1970，《月刊文法》3月号）と言えよう。

ここでは、『日本文法大辞典』の解説にしたがい、「で」の用法をその意味的特徴から次のように分類しておく。

- (1) 動作・作用の行われる場所・場面を表す。

まいあさ、ここでバスにのります。(第五課⑭)

しょくどうであさごはんをたべました。(同上⑮)

わたしは、いま、じぶんのへやでてがみをかいています。(第十一課⑤)

これらの「で」は、「において」の意味で用いられる。

- (2) 動作を行う主体としての組織・団体を表す。

野党側で、強い反対を示している。

NHKでは、……を実施している。

この「で」は、「においては」「としては」の意である。

- (3) 手段・材料を表す。

まえださんは、バスでがっこうへいきます。(第五課⑬)

なんでがっこうへきましたか。(同上⑮)

花でへやを飾る。

紙でふくろを作る。

この「で」は、「によって」「を用いて」の意である。

- (4) 原因・理由・根拠を表す。

田中君が交通事故で……。 (第十三課⑨)

かぜで一週間休んだ。

法律で禁じられている。

これらの「で」は、「のために」「によって」の意である。

- (5) 動作・作用の行われる場合の状態。

きょうは、みんなで修善寺へ紅葉を見に行きました。(第十課①)

かえりに、みんなでやきとりをたべて、ビールをのみました。(第十一課⑮)

フル・スピードで走ってきた。

満たされぬ気持で別れた。

これらの「で」は「いっしょに」「の様子で」「の状態で」の意である。

- (6) 期限・限度・範囲を表す。

よしこさんは、せいようのがかのなかでだれがいちばんすきですか。

(第八課⑩)

これでいかがですか。(第十三課⑳)

申し込み期限は明日で締切る。

五枚で一組です。

これらの「で」は、数多くのものの中から、ある特定の範疇を限って取りあげる意である。

(7) 「では」の形で、時を表す語について、動作の行われる時期を表す。

今日では、宇宙旅行はもはや夢ではなくなった。

「では」の形では、時を表す語のみではなく種々の語に付いて、限定や範疇の意を表すことが多い。

日本語教育においては、関連する他の助詞との異同が問題となるが、まず、場所を表す「で」と「に」との関係についてみてみよう。

[39] 庭で物置を作った。

[40] 庭に物置を作った。

[39]は、動作・作用の行われる場所を示すものであり、[40]は、事物がある状態で存在する場所を示すものである。

[41] 東京で生活する。

[42] 東京に住む。

[41]は、その場所における動作・作用を表すものであり、[42]は、主体の長期に渡る存在・ありどころを示すものである。

[43] ベッド $\left\{ \begin{array}{l} \text{で} \\ \text{に} \end{array} \right\}$ 寝る。

[43]の場合は、「で」も「に」もどちらも用いられる。ただし、

[44] 自分のへやで、ベッドに寝る。

のように、一つの文の中で同時に用いる時には、「で」によって広い範囲を示す。「で」も「に」もどちらも用いることのできる動詞には、「休む」「泊まる」「泣き伏す」「生まれる」などがある。

[45] 学校で試験がある。

[46] 学校に黒板がある。

[45]は、行事の有無を表し、[46]は、事物の存在についての有無を表す。このような場合は、

(場所) で (行事) がある

(場所) に (事物) がある

のように、文型的提示によりその意味を理解させることができる。

次に、手段・材料を表す「で」は、「から」との異同が問題となる。

[47] 日本酒は米 $\left. \begin{array}{l} \text{で} \\ \text{から} \end{array} \right\}$ 作る。

この場合は、「で」も「から」も用いることができる。ただし、「米で作った酒」と言う意味を連体助詞を用いて示す場合には、「米での酒」とは言わず、「米からの酒」と言う。

[48] 机は木で作る。

[49] この油はなたねからとる。

[48]は、「から」は用いにくい。逆に、[49]は、「で」が使えない。「で」は生産に関する手段・材料・方法を示し、「から」は原料・構成要素を示すのである。原料が生産物となって形態を変える場合には「から」を用い、それ以外の場合には「で」を用いることが多い。なお材料を表す「で」は、第十八課「よみせをみにいきませんか」で学習項目として取り上げられている。

3.2.3. 色に関する形容詞

形容詞の用法については第三課で、形容動詞については第六課で解説したが、ここでは色に関する言い方についてまとめておく。

色彩に関する言い方は、その言語を有する国民によってとらえ方が異なり、日本語の場合も外国人には奇異な感じを与える場合がある。例えば、「青い麦」「青いりんご」「青信号」などという言い方はおかしい、「緑色の」と言うべきではないかとよく指摘される。しかし、「青、緑、藍、紺」などすべてを「青」で代表して言うことは、「赤、紅、朱、緋」などを「赤」で代表して言うのと同様であろう。ちなみに、『日本国語大辞典』によれば、「あお」は、「本来は、黒と白との中間の範囲を示す広い色名で、主に青、緑、藍をさし、時には、黒、白をさした。」とある。ここでは、事物に対する色彩的とらえ方は別として、文法的な用法について述べておく。

- A 赤いりんご 青いりんご 白いシャツ 黒い雲
B 紫色の花 緑色の葉 黄色のレモン 茶色の靴

C まっ赤な夕日 まっ青な海 まっ白な雪 まっ黒な髪

連体修飾語として名詞を形容する場合、Aのグループは、形容詞の連体形「～い」の形を、Bのグループは、名詞（色名）+連体助詞「の」の形を、Cのグループは、形容動詞の連体形「な」の形をとるものである。Aのグループは、「赤色の」「青色の」とも言えるが、Bの「紫」「緑」は「紫い」「緑い」とか形容詞の形は一般にとらない。ただし、「黄色」と「茶色」は「黄色い」「茶色い」の言い方をすることもある。この映画では、㉞で「あの黄色いお花」と提示した。「黄色の」に比し、「黄色い」のほうがやや口語的であろうか。Cのグループは、「真に」「本当に」の意味の接頭語「ま」を付すことにより、形が形容動詞になるものである。その際音声的なわたりとして促音が用いられることにより発音が変わるものもある。色に関する形容詞の指導は、特に留意する必要がある。

3.3. 練習問題

主な学習項目に関する練習例の若干を示す。

練習は、学習者の資質・能力・提出順等を考慮し、学習状況に適したものを作成することが望ましい。

A 「～てください」の形作りの練習

A-1 例のように「～てください」の形を言いなさい。

〔例〕（早く起きる）

早く起きます。→早く起きてください。

早く起きません。→早く起きないでください。

- | | | | |
|-----------|----------|-----------|-----------|
| a. パスを降りる | b. ここにいる | c. いすにかける | d. 御飯を食べる |
| e. 練習をする | f. ここへ来る | g. 名前を書く | h. 会社へ行く |
| i. プールで泳ぐ | j. お金を貸す | k. 荷物を持つ | l. 死ぬ |
| m. 友達と遊ぶ | n. 本を読む | o. へやに入る | p. おかしを買う |

A-2 動詞の形に注意して、「～てください」の形を言いなさい。

- | | | |
|----------------|---------------|---------------|
| a. { 帰る
変える | b. { 切る
着る | c. { する
刷る |
|----------------|---------------|---------------|

A-3 アクセントに注意して、「～てください」の形を言いなさい。

- | | | |
|---------------|---------------|---------------------|
| a. { 読む
呼ぶ | b. { 着る
来る | c. { 買う
飼う
勝つ |
|---------------|---------------|---------------------|

A-4 絵を見て、例のように言いなさい。

〔例〕（花の絵） 赤い花4本、白い花3本→その赤いのを4本と白いのを3本ください。

- | |
|------------------------------|
| a. [花の絵] 白い花6本、赤い花5本 |
| b. [花の絵] 白い花8本、赤い花4本、黄色の花3本 |
| c. [りんごの絵] 大きいりんご20、小さいりんご12 |
| d. [りんごの絵] 赤いりんご8、青いりんご4 |
| e. [靴下の絵] 長い靴下2足、短い靴下4足 |
| f. [靴下の絵] 茶色の靴下3足、青い靴下1足 |

B 前提語を付けた置き換え練習

B-1 例のように、下線の部分を置き換えて言いなさい。

〔例〕 待つ→すみませんが、ちょっと待ってくださいませんか。

- | | | | |
|------------|-----------|----------|----------|
| a. 本を見せる | b. お金を貸す | c. 荷物を持つ | d. 手紙を読む |
| e. 山田さんと呼ぶ | f. 時計をなおす | g. 名前を書く | h. 道を教える |
| i. 買物に行く | j. ここへ来る | | |

B-2 例のように、下線の部分を置き換えて言いなさい。

〔例〕 へやに入る→すみませんが、へやに入らないでください。

- | | | | |
|-----------|------------|-------------|-----------|
| a. へやを出る | b. ここで遊ぶ | c. ここに荷物を置く | d. たばこをすう |
| e. こちらを見る | f. 紙くずを捨てる | g. 話をする | h. 子ども |

もを連れてくる

C 「～しましょう」、「～ませんか」の練習

C-1 例のように、「～ませんか」、「～しましょう」を用いて言いなさい。(学習者を勧誘者(A), 応諾者(B)に分けて言わせる。)

〔例〕 お見舞いに行く → $\left\{ \begin{array}{l} A \text{ 「いっしょにお見舞いに行きませんか。」} \\ B \text{ 「ええ、いっしょに行きましょう。」} \end{array} \right.$

a. 買物に行く b. 見物に行く c. 本を買いに行く d. 映画を見に行く
e. 昼御飯を食べる f. コーヒーを飲む g. テレビを見る
h. 練習をする

C-2 例のように、下線の部分を置き換えて言いなさい。

〔例〕 食べる → ちよっと食べてみましょう。

a. 飲む b. 書く c. 聞く d. 行く e. 調べる f. 見る g. 持ってくる
h. 練習をする

D 「～でもいいです」、「～はいけません」の練習

例のように、下線の部分を置き換えて言いなさい。(学習者を、質問者(A), 応答者(B)に分けて言わせる。)

〔例〕 歩く → $\left\{ \begin{array}{l} A \text{ 「もう歩いてもいいですか。」} \\ B \text{ 「まだ歩いてはいけません。」} \end{array} \right.$

a. 書く b. 帰る c. 入る d. 休む e. 見る f. 起きる
g. 寝る h. 食べる i. 運動をする

E 「～なければいけません」の練習

E-1 例のように、言い換えなさい。

〔例〕 薬を飲む → 薬は、かならず飲まなければなりません。

- a. お金を返す b. ドアをしめる c. 新聞を読む d. 宿題をやる
 e. 試験を受ける f. 規則を守る g. 学校へ行く h. 6時に起きる

E-2 例のように、質問に対する答えを「はい」「いいえ」を付けて言いなさい。

〔例〕 薬を飲まなくてもいいですか。

- { はい、薬は飲まなくてもかまいません。
 { いいえ、薬は、かならず飲まなければなりません。

- a. 宿題をやらなくてもいいですか。
 b. お金を返さなくてもいいですか。
 c. 試験を受けなくてもいいですか。
 d. 規則を守らなくてもいいですか。
 e. 学校へ行かなくてもいいですか。

F 場面にあわせた会話練習（絵や写真、映像などを見せながら、役割を分担して行う）

F-1 例のように、店員と客のことばをそれぞれ言いなさい。

- 〔例〕 (花屋で) { 店員：いらっしゃいませ。
 { 客：お花をください。
 { 店員：どのお花にしましょうか。
 { 客：その赤いのを四本と白いのを二本ください。

- a. 果物屋でりんごを買う。
 b. 洋品店で靴下を買う。
 c. 文房具屋で鉛筆を買う。

この他、この映画の場面を使って「電話口で」「花屋で」「病室で」など実際の会話練習をすることができる。

G 進んだ段階での利用法

単純な利用法としては、映画の内容をめぐって教師と学習者が対話を行うことが考えられる。ビデオが利用できれば、それぞれの役割分担を決めて全く同じ言語表現を吹き込んでみることもできるし、また言語行動についてナレーションを加えることもできよう。あるいは、場面によっていい体の会話をくだけた普通体の会話に直して言わせることも考えられる。この他、映画・ビデオの利用については、種々の方法が考えられるが、この映画は、あくまでも日本語教育の補助教材であることを念頭において活用されることが望ましい。

4. 参考文献

A. 単行本

- 岩波書店 1977 『岩波講座日本語7 文法Ⅱ』
- 久野 暉 1973 『日本文法研究』 大修館書店
- 国立国語研究所 1951 『現代語の助詞・助動詞——用法と実例』 秀英出版
- _____ 1960 『話しことばの文型(1)——対話資料による研究——』 秀英出版
- _____ 1963 『話しことばの文型(2)——独話資料による研究——』 秀英出版
- 阪田雪子・倉持保男 1980 『教師用日本語教育ハンドブック④文法Ⅱ，助動詞を中心にして』 国際交流基金
- 鈴木 忍 1978 『教師用日本語教育ハンドブック③文法Ⅰ，助詞の諸問題』 国際交流基金
- 高橋太郎 1976 「すがたともくろみ」『日本語動詞のアスペクト』 むぎ書房
- 永野 賢 1958 『学校文法概説』 浅倉書店
- 西尾寅弥 1972 『形容詞の意味用法の記述的研究』 秀英出版
- 橋本四郎 1964 「動詞の音便形」『口語文法講座3』 明治書院

- 林 四郎 1960 『基本文型の研究』 明治図書出版
 文化庁 1977 『言葉に関する問答集3』
 松井利男 1963 「文型・基本文型——学習基本文型への試み」『講座 現代語1』 明治書院
 松村 明編 1969 『古典語現代語助詞助動詞詳説』 明治書院
 三尾 砂 1958 『話しことばの文法』 法政大学出版局
 宮島達夫 1972 『動詞の意味・用法の記述的研究』 秀英出版
 森田良行 1977 『基礎日本語——意味と使い方』 角川書店
 湯沢幸吉郎 1944 『日本語表現文典』 国際文化振興会
 吉川武時 1976 「現代日本語動詞のアスペクト」『日本語動詞のアスペクト』 むぎ書房

B. 辞書・事典

- 国語学会編 1955 『国語学辞典』 東京堂出版
 _____ 1980 『国語学大辞典』 東京堂出版
 松村 明編 1971 『日本文法大辞典』 明治書院
 釘本久春編 1962 『現代語の話し方事典』（「見舞いと慰藉について」「電話の話し方について」） 福音館書店

C. 雑誌論文

- 池尾スミ 1979 「場面的アプローチにおける〈場面ユニット〉の設定と表現のバリエーションのとりえ方」『日本語教育38号』
 奥津敬一郎 1969 「数量的表現の文法」『日本語教育14号』
 神尾昭雄 1980 「『に』と『で』」『月刊言語9月号』
 北川千里 1976 「『なくて』と『ないで』」『日本語教育29号』
 木之下正雄 1970 「格助詞」『月刊文法3月号』
 小林幸江 1978 「現代語に見られる陳述副詞の研究」『日本語学校論集5号』

- 城田 俊 1977 「くう／よう」の基本的意味『国語学110』（『論集日本語研究7 助動詞』1979 有精堂 に採録）
- 田中章夫 1969 「助動詞か補助用言か」『月刊文法6月号——特集助動詞②』
- 田中 望 1979 「日常語における“説明”について」『日本語と日本語教育 第8号』
- 野元菊雄 1978 「敬語の段階」『日本語教育35号』
- _____ 1978 「ていねいさの順位」『国語学115』
- 日向茂男 1980 「談話における『はい』と『ええ』の機能」『国立国語研究所研究報告集—2—』
- 堀口和吉 1975 「『～シヨウ』『～シマシヨウ』の表現について」『日本語・日本文化第4号』
- 吉川武時 1979 「『していて下さい』の意味——『待って下さい』と『待っていて下さい』の使い分け——」『日本語学校論集 6号』

資 料

資料1. 使用語彙一覧

これは、この映画中に言語表現として現れた全ての語について一覧表にしたものである。資料2.のシナリオ全文同様、教材として活用できることも考慮してかな(ひらがな、かたかな)書きにしてある。

1. 見出し語はアイウエオ順に配列し、そこにその使用文例を全て書き出した。
2. 見出し語の認定については、初級日本語教育の立場に立っている。
 - 2.-1. 接頭辞「お」や、接尾辞「さん」「ほん(本)」「ど(度)」は、見出し語として取り上げている。ただし「おみまい」「おたく」や、「おかあさん」等は、そのまま見出し語に立てている。
 - 2.-2. 数詞は、助数詞と切り離して見出し語に立てている。
 - 2.-3. 動詞は、終止形を見出し語にしている。サ変複合動詞は、「する」を切り離して二語扱いにしている。
 - 2.-4. 形容動詞は、「___な」の形を見出し語にしている。
 - 2.-5. 「名詞+なんです」の「なん」は、一語扱いにして見出し語にしている。
 - 2.-6. 「それじゃあ」「それで」「実は」等は、一語扱いにして見出し語にしている。
 - 2.-7. 「おだいに」等、慣用的表現とした扱ったものや、「気をつける」等、熟語的表現として扱ったものは、そのまま見出し語にしている。
 - 2.-8. 「いけない」「いけません」は、見出し語にしている。
 - 2.-9. 接続助詞「て」、またそれに「は」や「も」の付いた「ては」や「ても」は、ここでは動詞部分に含め見出し語にしていない。「いなくては」「のまなければ」等も、その動詞の一変化形として扱っている。
3. 見出し語の語義、活用変化、他の語との結びつき等に基づいて下位分

類する場合には、(1)(2)……のようにした。

- 3.—1. 「ほん(本)」等、数詞によって助数詞の発音が異なる場合は下位分類した。
- 3.—2. 動詞は、まず本動詞としての用法と補助動詞としての用法で大きく二分した。《本動詞の場合》「ます」形であるか、「——て」等の形であるかで下位分類し、また常体での言い方は、一語扱いにして別の分類にした。《補助動詞の場合》補助動詞が違えば下位分類してある。ただし、その意味・用法の違いによる下位分類はしていない。
- 3.—3. 「ください」「いけません」は、その用法や前接する語の形で下位分類してある。
- 3.—4. 「です」は、それに伴う終助詞の種類、また「です」か「なんです」であるかにより下位分類してある。
- 3.—5. 「はい」は応答語であるか、呼びかけ語であるかで下位分類してある。
- 3.—6. 助詞「か」「が」「に」「ね」「の」等は、その意味、用法によって下位分類してある。
4. 「ます」「ました」については文例の列挙を省略し、文番号だけを示した。「ません」「ましょう」は省略していない。「ません」は、その用法により下位分類してある。
5. 使用文例の文頭には、①②……の数字がつけてある。これはシナリオでの文通し番号であり、この解説書全体に共通のものである。同一見出し語内では、この順に文例を提出した。(1)(2)……と下位分類した場合にも、その分類内で同一の提出順をとっている。全くの同一文については通し番号を横に並べ、引用を一回ですませた。
6. 見出し語の横には〔 〕で当用漢字の範囲内で漢字を示し、またその横には()で語の使用回数を示した。

ああ（１）

⑭ ああ、よかった。

あかい〔赤い〕（２）

⑳ このあかいのとしろいのにしませんか。

㉑ じゃあ、このあかいのをよんほんと、しろいのをさんぽん、ください。

あした〔明日〕（１）

⑲ いいえ、あしたのごごいきます。

あっ（６）

① あっ、もしもし、いしださんのおたくですか。

③ あっ、おかあさんですね。

⑨ あっ、はるこさん、じつは、たなかくんがこうつうじこで——。

⑫ あっ、そのほんは、ベッドのうえにおいてください。

⑮ あっ、いけない。

⑰ あっ、きをつけてください。

あの（２）

⑳ それじゃあ、あのきいろいおはなもいれてみましょうか。

㉑ あのはなもろっぽん、ください。

あまり〔余り〕（１）

⑲ あまりしんぱいしないでください。

あら（１）

⑳ あら、いちろうさん、はるこさん。

ありがとう（３）

⑥⑩ どうもありがとう。

⑨⑫ きょうは、どうもありがとうございました。

⑮⑰ きょうは、ありがとう。

あるく〔歩く〕（２）

(1)⑶⑷ いいえ、まだあるいてはいけません。

(2)66 もうあるいてもいいですか。

いい (4)

(1)28 おみまいには、どんなおはながいいかしら。

31 どれがいいでしょう。

65 とてもいいです。

(2)66 もうあるいてもいいですか。

いいえ (2)

19 いいえ、あしたのごごいきます。

67 いいえ、まだあるいてはいけません。

いう [言う] (1)

16 えっ、もういちどびょういんのなまえをいってください。

いかが (2)

30 こちらのおはななんか、いかがですか。

34 これでいかがですか。

いく [行く] (5)

(1)18 それで、きむらさん、おみまいにいきましたか。

19 いいえ、あしたのごごいきます。

20 はるこさんも、いっしょにおみまいにいきませんか。

24 ええ、いっしょにいきましょう。

(2)46 たつのがわびょういんまでいってください。

いけない (1)

69 あっ、いけない。

いけません (3)

(1)67 まだあるいてはいけません。

78 まだねていなくてはいけませんよ。

(2)70 くすりは、かならずのまなければいけませんよ。

いしだ [石田] (2)

① あっ、もしもし、いしださんのおたくですか。

② はい、いしだです。

いち〔一〕(1)

⑩ えっ、もういちどびょういんのなまえをいってください。

いちろう〔一郎〕(2)

④⑧ あら、いちろうさん、はるこさん。

⑦⑨ いちろうさん、そのはいざらをしたにいてくたさいませんか。

いつ(1)

⑩ えっ、いつなんですか。

いっしょに〔一緒に〕(2)

⑩ はるこさんも、いっしょにおみまいにいきませんか。

⑪ ええ、いっしょにいきましょう。

いらっしゃいませ(1)

⑫ いらっしゃいませ。

いる(4)

(1)⑤ はるこさん、いますか。

⑥ ええ、いますよ。

(2)⑥ どうぞねていてください。

(3)⑧ まだねていなくてはいけませんよ。

いれる〔入れる〕(2)

③⑦ それじゃあ、あのきいろいおはなもいれてみましようか。

④⑪ きいろいのもろっぼん、いれておきます。

うえ〔上〕(2)

①⑨ すみませんが、そのだいのうえにいてください。

②⑥ あっ、そのほんは、ベッドのうえにいてください。

ええ(7)

⑥ ええ、いますよ。

⑪ ええ、いっしょにいきましょう。

⑫ ええ、そうしましよう。

- ㉔ ええ、そうしてください。
- ㉕ ええ、もうだいじょうぶです。
- ㉖ ええ、あまりしんぱいしないでください。
- ㉗ ええ。

えっ (2)

- ㉘ えっ、いつなんですか。
- ㉙ えっ、もういちどびょういんのなまえをいってください。

お (5)

- ㉚ どのおはなにしましょうか。
- ㉛ おみまいには、どんなおはながいいかしら。
- ㉜ こちらのおはななんか、いかがですか。
- ㉝ それじゃあ、あのきいろいおはなもいれてみましょうか。
- ㉞ はるこさん、すみませんが、おさとういれをとってくださいませんか。

おかあさん〔お母さん〕 (2)

- ㉟ おかあさんですね。
- ㊱ おかあさん、ちょっとおこしてください。

おく〔置く〕 (4)

- (1) ㊲ すみませんが、そのだいのうえにおいてください。
- ㊳ あっ、そのほんは、ベッドのうえにおいてください。
- ㊴ いちろうさん、そのはいざらをしたにおいてくださいませんか。
- (2) ㊵ きいろいのもろっぼん、いれておきます。

おこす〔起こす〕 (1)

- ㊶ おかあさん、ちょっとおこしてください。

おだいじに〔お大事に〕 (1)

- ㊷ おだいじに。

おたく〔お宅〕 (1)

- ㊸ あっ、もしもし、いしださんのおたくですか。

おみまい〔お見舞い〕（４）

- ⑮ それで、きむらさん、おみまいにいきましたか。
- ⑳ はるこさんも、いっしょにおみまいにいきませんか。
- ㉔ おみまいには、どんなおはながいいかしら。
- ㉙ これ、おみまいの……。

か（１９）

- (1)① あっ、もしもし、いしださんのおたくですか。
- ⑤ はるこさん、いますか。
- ⑩ えっ、いつなんですか。
- ⑫ それで、ひどいけがなんですか。
- ⑮ それで、きむらさん、おみまいにいきましたか。
- ⑳ こちらのおはななんか、いかがですか。
- ㉔ これでいかがですか。
- ④③ どうですか。
- ④④ きぶんは、どうですか。
- ④⑥ もうあるいてもいいですか。
- ④⑧ くすりは、のみましたか。
- (2)②⑩ はるこさんも、いっしょにおみまいにいきませんか。
- ②② どのおはなにしましょうか。
- ②④ みせのひとにそうだんしてみましようか。
- ②⑥ このあかいのとしろいのにしませんか。
- ②⑦ それじゃあ、あのきいろいおはなもいれてみましようか。
- (3)②⑨ いちろうさん、そのはいざらをしたにお願いできませんか。
- ②⑧ はるこさん、すみませんが、おさとういれをとってくださいませんか。
- (4)②⑨ そうですか。

が（５）

- (1)⑨ あっ、はるこさん、じつは、たなかくんがこうつうじこで――。

- ㉘ おみまいには、どんなおはながいいかしら。
㉙ どれがいいでしょう。
(2)㉚ すみませんが、そのだいのうえにおいでください。
㉛ はるこさん、すみませんが、おさとういれをとってくださいますか。

かしら (1)

- ㉘ おみまいには、どんなおはながいいかしら。

かな (1)

- ㉞ ちょっとすくないかな。

かならず [必ず] (1)

- ㉟ くすりは、かならずのまなければいけませんよ。

きいろい [黄色い] (2)

- ㊱ それじゃあ、あのきいろいおはなもいれてみましようか。
㊲ きいろいのもろっぼん、いれておきます。

きのう [昨日] (1)

- ㊳ きのうなんです。

きぶん [気分] (1)

- ㊴ きぶんは、どうですか。

きむら [木村] (3)

- ㊵ ぼく、きむらです。
㊶ もしもし、きむらさん、こんにちは。
㊷ それで、きむらさん、おみまいにいきましたか。

きゅうきゅうしゃ [救急車] (1)

- ㊸ でも、きゅうきゅうしゃでたつのがわびょういんににゅういんしました。

きょう [今日] (2)

- ㊹ きょうは、どうもありがとうございました。
㊺ きょうは、ありがとう。

きれいな(1)

④ とてもきれいですね。

きをつける〔気をつける〕(1)

⑦ あっ、きをつけてください。

くすり〔薬〕(2)

⑧ くすりは、のみましたか。

⑩ くすりは、かならずのまなければいけませんよ。

ください〔下さい〕(16)

(1)③ ジャあ、このあかいのをよんほんと、しろいのをさんぼん、ください。

③ あのはなもろっぼん、ください。

(2)⑦ ちょっとまってください。

⑩ えっ、もういちどびょういんのなまえをいってください。

⑫ ええ、そうしてください。

⑬ たつのがわびょういんまでいってください。

⑭ おかあさん、ちょっとおこしてください。

⑮ どうぞねていてください。

⑯ すみませんが、そのだいのうえにおいてください。

⑰ あっ、そのほんは、ベッドのうえにおいてください。

⑱ あっ、きをつけてください。

⑲ はやくよくなってください。

⑳ はやく、げんきになってください。

(3)① ええ、あまりしんばいしないでください。

(4)⑨ いちろうさん、そのはいざらをしたにおいてくださいませんか。

⑧ はるこさん、すみませんが、おさとういれをとってくださいませんか。

くん〔君〕(1)

⑨ あっ、はるこさん、じつは、たなかくんがこうつうじこで――。

けが（２）

⑫ それで、ひどいけがなんですか。

⑬ さいわい、たいしたけがではありません。

げんきな〔元気な〕（１）

⑭ はやく、げんきになってください。

こうつう〔交通〕（１）

⑮ あっ、はるこさん、じつは、たなかくんがこうつうじこで——。

ごご〔午後〕（１）

⑯ いいえ、あしたのごごいきます。

ございました（１）

⑰ きょうは、どうもありがとうございます。

こちら（１）

⑱ こちらのおはななんか、いかがですか。

この（２）

⑲ このあかいのとしろいのにしませんか。

⑳ ジャあ、このあかいのをよんほんと、しろいのをさんぽん、ください。

これ（２）

㉑ これでいかがですか。

㉒ これ、おみまいの……。

こんにちは（３）

㉓ もしもし、きむらさん、こんにちは。

㉔ こんにちは。

さあ（１）

㉕ さあ、どうぞ。

さいわい〔幸い〕（１）

㉖ さいわい、たいしたけがではありません。

さとういれ〔砂糖入れ〕（１）

㉔ はるこさん、すみませんが、おさとういれをとってくださいますか。

さん〔三〕(1)

㉓ ジャあ、このあかいのをよんほんと、しろいのをさんぼん、ください。

さん(10)

① あっ、もしもし、いしださんのおたくですか。

⑤ はるこさん、いますか。

⑧ もしもし、きむらさん、こんにちは。

⑨ あっ、はるこさん、じつは、たなかくんがこうつうじこで――。

⑬ それで、きむらさん、おみまいにいきましたか。

⑰ はるこさんも、いっしょにおみまいにいきませんか。

⑳ あら、いちろうさん、はるこさん。

㉒ あら、いちろうさん、はるこさん。

㉖ いちろうさん、そのはいざらをしたにいてくださいますか。

㉘ はるこさん、すみませんが、おさとういれをとってくださいますか。

じこ〔事故〕(1)

⑨ あっ、はるこさん、じつは、たなかくんがこうつうじこで――。

した〔下〕(1)

㉖ いちろうさん、そのはいざらをしたにいてくださいますか。

じつは〔実は〕(1)

⑨ あっ、はるこさん、じつは、たなかくんがこうつうじこで――。

しつれい〔失礼〕(3)

㉔ ちょっとしつれいします。

㉒ そろそろしつれいします。

㉗ ジャ、しつれいします。

ジャ(1)

⑨⑦ ジャ、しつれいします。

じゃあ(1)

③③ ジャあ、このあかいのをよんほんと、しろいのをさんぼん、ください。
い。

しろい〔白い〕(2)

③② このあかいのとしろいのにしませんか。

③③ ジャあ、このあかいのをよんほんと、しろいのをさんぼん、ください。

しんばい〔心配〕(1)

⑨① ええ、あまりしんばいしないでください。

すくない〔少ない〕(1)

③⑥ ちょっとすくないかな。

すみません(6)

②⑥⑤⑦⑧⑦⑧⑦ すみません。

⑥① すみませんが、そのだいのうえにおいてください。

③③ はるこさん、すみませんが、おさとういれをとってくださいませんか。

する(10)

(1)①⑤ でも、きゅうきゅうしゃでたつのがわびょういんににゅういんしました。
た。

②⑤ ええ、そうしましょう。

③⑧ ちょっとしつれいします。

③⑧ そろそろしつれいします。

③⑦ ジャ、しつれいします。

(2)②② どのおはなにしましょうか。

③② このあかいのとしろいのにしませんか。

(3)②④ みせのひとにそうだんしてみましょうか。

④② ええ、そうしてください。

(4)⑨① ええ、あまりしんばいしないでください。

そう(7)

㉔㉕ そうですね——。(考え込むふうに)

㉖ ええ、そうしましょう。

㉗ そうですね。(考え込むふうに)

㉘ そうですね。(了承的に)

㉙ ええ、そうしてください。

㉚ そうですか。

そうだん〔相談〕(1)

㉛ みせのひとにそうだんしてみましようか。

その(3)

㉜ すみませんが、そのだいのうえにおいてください。

㉝ あっ、そのほんは、ベッドのうえにおいてください。

㉞ いちろうさん、そのはいざらをしたにおいてくださいませんか。

それじゃあ(1)

㉟ それじゃあ、あのきいろいおはなもいれてみましようか。

それで(2)

㊱ それで、ひどいけがなんですか。

㊲ それで、きむらさん、おみまいにいきましたか。

そろそろ(1)

㊳ そろそろしつれいします。

だい〔台〕(1)

㊴ すみませんが、そのだいのうえにおいてください。

たいおん〔体温〕(1)

㊵ はい、たいおんをはかって。

たいおんけい〔体温計〕(1)

㊶ たいおんけいをみせて。

たいした〔大した〕(1)

㊷ さいわい、たいしたけがではありません。

だいじょうぶ〔大丈夫〕(1)

⑤⑦ ええ、もうだいじょうぶです。

たつのがわ〔辰之川〕（3）

⑮ でも、きゅうきゅうしゃでたつのがわびょういんににゅういんしました。

⑰ たつのがわびょういんです。

④⑥ たつのがわびょういんまでいってください。

たなか〔田中〕（1）

⑨ あっ、はるこさん、じつは、たなかくんがこうつうじこで——。

ちょっと（4）

⑦ ちょっとまってください。

③⑥ ちょっとすくないかな。

⑤⑤ おかあさん、ちょっとおこしてください。

⑤⑧ ちょっとしつれいします。

で（3）

⑨ あっ、はるこさん、じつは、たなかくんがこうつうじこで——。

⑮ でも、きゅうきゅうしゃでたつのがわびょういんににゅういんしました。

③④ これでいかがですか。

でしょう（1）

③① どれがいいでしょう。

です（21）

(1)② はい、いしだです。

④ ぼく、きむらです。

⑰ たつのがわびょういんです。

⑤⑦ ええ、もうだいじょうぶです。

⑥⑤ とてもいいです。

(2)① あっ、もしもし、いしださんのおたくですか。

③⑩ こちらのおはななんか、いかがですか。

- ③④ これではいかがですか。
- ④⑤ どうですか。
- ⑤⑥ きぶんは、どうですか。
- ⑥⑦ もうあるいてもいいですか。
- ⑦⑧ そうですか。
- (3)③ あっ、おかあさんですね。
- ③④ そうですね。(了承的に)
- ④⑤ とてもきれいですね。
- (4)③④ そうですね——。(考え込むふうに)
- ④⑤ そうですね。(考え込むふうに)
- (5)①② きのうなんです。
- (6)①② えっ、いつなんですか。
- ②③ それで、ひどいけがなんですか。

ではありません(1)

- ③④ さいわい、たいしたけがではありません。

でも(1)

- ⑤⑥ **でも**、きゅうきゅうしゃでたつのがわびょういんににゅういんしました。

と(2)

- ③④ このあかいのとしろいのにしませんか。
- ④⑤ じゃあ、このあかいのをよんほんと、しろいのをさんぼん、ください。

ど〔度〕(1)

- ⑥⑦ えっ、もういちどびょういんのなまえをいってください。

どう(2)

- ④⑤ どうですか。
- ⑤⑥ きぶんは、どうですか。

どうぞ(3)

㉙ さあ、どうぞ。

㉚ どうぞねていてください。

㉛ どうぞ。

どうも (3)

㉜ どうもありがとう。

㉝ どうも。

㉞ きょうは、どうもありがとうございました。

とる [取る] (1)

㉟ はるこさん、すみませんが、おさとういれをとってくださいませんか。

とても (2)

㊱ とてもきれいですね。

㊲ とてもいいです。

どの (1)

㊳ どのおはなにしましょうか。

どれ (1)

㊴ どれがいいでしょう。

どんな (1)

㊵ おみまいには、どんなおはながいいかしら。

なまえ [名前] (1)

㊶ えっ、もういちどびょういんのなまえをいってください。

なる (2)

㊷ はやくよくなってください。

㊸ はやく、げんきになってください。

なん (3)

㊹ えっ、いつなんですか。

㊺ きのうなんです。

㊻ それで、ひどいけがなんですか。

なんか(1)

㉔ こちらのおはななんか、いかがですか。

に(9)

(1)㉑ でも、きゅうきゅうしゃでたつのがわびょういんににゅういんしました。

㉒ すみませんが、そのだいのうえにおいてください。

㉓ あっ、そのほんは、ベッドのうえにおいてください。

㉔ いちろうさん、そのはいざらをしたにおいてくださいませんか。

(2)㉕ それで、きむらさん、おみまいにいきましたか。

㉖ はるこさんも、いっしょにおみまいにいきませんか。

(3)㉗ どのおはなにしましょうか。

㉘ このあかいのとしろいのにしませんか。

(4)㉙ みせのひとにそうだんしてみましようか。

(5)㉚ おみまいには、どんなおはながいいかしら。

にゅういん〔入院〕(1)

㉑ でも、きゅうきゅうしゃでたつのがわびょういんににゅういんしました。

ね(6)

(1)㉑ あっ、おかあさんですね。

㉒ そうですね。(了承的に)

㉓ とてもきれいですね。

(2)㉔㉕ そうですね——。(考え込むふうに)

㉖ そうですね。(考え込むふうに)

ねる〔寝る〕(2)

㉑ どうぞねていてください。

㉒ まだねていなくてはいけませんよ。

の(13)

(1)㉑ あっ、もしもし、いしださんのおたくですか。

- ⑮ えっ、もういちどびょういんのなまえをいってください。
- ⑯ いいえ、あしたのごごいきます。
- ⑳ みせのひとにそうだんしてみましようか。
- ㉑ こちらのおはななんか、いかがですか。
- ㉒ すみませんが、そのだいのうえにおいでください。
- ㉓ あっ、そのほんは、ベッドのうえにおいでください。
- (2)㉔ これ、おみまいの……。
- (3)㉕ このあかいのとしろいのにしませんか。
- ㉖ このあかいのとしろいのにしませんか。
- ㉗ じゃあ、このあかいのをよんほんと、しろいのをさんぽん、ください。
- ㉘ じゃあ、このあかいのをよんほんと、しろいのをさんぽん、ください。
- ㉙ きいろいのもろっぽん、いれておきます。

のむ〔飲む〕(2)

- (1)㉚ くすりは、のみましたか。
- (2)㉛ くすりは、かならずのまなければいけませんよ。

は(7)

- (1)㉜ あっ、そのほんは、ベッドのうえにおいでください。
- ㉝ きぶんは、どうですか。
- ㉞ くすりは、のみましたか。
- ㉟ くすりは、かならずのまなければいけませんよ。
- ㊱ きょうは、どうもありがとうございました。
- ㊲ きょうは、ありがとう。
- (2)㊳ おみまいには、どんなおはながいいかしら。

はい(13)

- (1)㊴ はい、いしだです。
- ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ はい。(応答)
- (2)㊺ はい、たいおんをはかって。

⑦⑧⑨⑩⑪⑫ はい。(注意喚起)

はいざら〔灰皿〕(1)

⑬ いちろうさん、そのはいざらをしたにお願いできませんか。

はかる〔計る〕(1)

⑭ はい、たいおんをはかって。

はな〔花〕(5)

⑮ どのおはなにしましょうか。

⑯ おみまいには、どんなおはながいいかしら。

⑰ こちらのおはななんか、いかがですか。

⑱ それじゃあ、あのきいろいおはなもいれてみませんか。

⑲ あのはなもろっぼん、ください。

はやい〔早い〕(2)

⑳ はやくよくなってください。

㉑ はやく、げんきになってください。

はるこ〔春子〕(5)

㉒ はるこさん、いますか。

㉓ あっ、はるこさん、じつは、たなかくんがこうつうじこで——。

㉔ はるこさんも、いっしょにおみまいにいきませんか。

㉕ あら、いちろうさん、はるこさん。

㉖ はるこさん、すみませんが、おさとういれをとってくださいませんか。

ひと〔人〕(1)

㉗ みせのひとにそうだんしてみませんか。

ひどい(1)

㉘ それで、ひどいけがなんですか。

びょういん〔病院〕(4)

㉙ でも、きゅうぎゅうしゃでたつのがわびょういんにゆういんしました。

㉚ えっ、もういちどびょういんのなまえをいってください。

⑰ たつのがわびょういんです。

⑱ たつのがわびょういんまでいってください。

ベッド (1)

⑳ あっ、そのほんは、ベッドのうえにおいてください。

ぼく (1)

㉑ ぼく、きむらです。

ほん [本] (1)

㉒ あっ、そのほんは、ベッドのうえにおいてください。

ほん [本] (4)

(1)㉓ ジャあ、このあかいのをよんほんと、しろいのをさんぼん、ください。

(2)㉔ ジャあ、このあかいのをよんほんと、しろいのをさんぼん、ください。

(3)㉕ あのはなもろっぼん、ください。

㉖ きいろいのもろっぼん、いれておきます。

ました (3) ⑮, ⑱, ㉘

ましょう (5)

㉗ ええ、いっしょにいきましょう。

㉘ どのおはなにしましょうか。

㉙ みせのひとにそうだんしてみましょうか。

㉚ ええ、そうしましょう。

㉛ それじゃあ、あのきいろいおはなもいれてみましょうか。

ます (7) ⑤, ⑥, ⑱, ㉜, ㉘, ㉚, ㉞

ません (4)

(1)㉟ はるこさんも、いっしょにおみまいにいきませんか。

㊱ このあかいのとしろいのにしませんか。

(2)㊲ いちろうさん、そのはいざらをしたにおいてくださいませんか。

㊳ はるこさん、すみませんが、おさとういれをとってくださいません

か。

まだ(2)

67 いいえ、まだあるいてはいけません。

78 まだねていなくてはいけませんよ。

まつ〔待つ〕(1)

7 ちょっとまってください。

まで(1)

46 たつのがわびょういんまでいってください。

みせ〔店〕(1)

24 みせのひとにそうだんしてみましようか。

みせる〔見せる〕(1)

74 たいおんけいをみせて。

みる(2)

24 みせのひとにそうだんしてみましようか。

37 それじゃあ、あのきいろいおはなもいれてみましようか。

も(4)

20 はるこさんも、いっしょにおみまいにいきませんか。

37 それじゃあ、あのきいろいおはなもいれてみましようか。

39 あのはなもろっぼん、ください。

41 きいろいのもろっぼん、いれておきます。

もう(3)

16 えっ、もういちどびょういんのなまえをいってください。

57 ええ、もうだいじょうぶです。

66 もうあるいてもいいですか。

もしもし(2)

1 あっ、もしもし、いしださんのおたくですか。

8 もしもし、きむらさん、こんにちは。

やあ(2)

㉟㉠ やあ。

よ (3)

㉡ ええ、いますよ。

㉢ くすりは、かならずのまなけばいけませんよ。

㉣ まだねていなくてはいけませんよ。

よい [良い] (2)

㉤ ああ、よかった。

㉥ はやくよくなってください。

よん [四] (1)

㉦ じゃあ、このあかいのをよんほんと、しろいのをさんぼん、ください。

ろく [六] (2)

㉧ あのはなもろっぼん、ください。

㉨ きいろいのもろっぼん、いれておきます。

を (7)

㉩ えっ、もういちどびょういんのなまえをいってください。

㉪ じゃあ、このあかいのをよんほんと、しろいのをさんぼん、ください。

㉫ じゃあ、このあかいのをよんほんと、しろいのをさんぼん、ください。

㉬ はい、たいおんをはかって。

㉭ たいおんけいを見せ。

㉮ いちろうさん、そのはいざらをしたにいてくたさいませんか。

㉯ はるこさん、すみませんが、おさとういれをとってくださいませんか。

資料2. シナリオ全文

題 名 日本語教育映画
「おみまいに いきませんか」
——依頼・勧誘の表現——

企 画 国立国語研究所
制 作 日本シネセル株式会社
フィルム 16% EKカラー・スタンダード
巻 数 全1巻
上映時間 5分
現 像 所 東映化学
録 音 読売スタジオ
完 成 昭和54年1月10日

制作スタッフ

制 作 静 永 純 一
制作担当 佐 藤 吉 彦
脚 本 前 田 直 明
演 出 前 田 直 明
演出助手 高 橋 涉
撮 影 野 崎 嘉 彦
撮影助手 楡 真須美
照 明 伴 野 功
音 楽 吉 田 征 雄
録 音 小 川 正 城 (読売スタジオ)
ネガ編集 亀 井 正
配 役 一 郎 高 沖 一 郎
春 子 辻 雅 子
田 中 伊 藤 博
春子の母 久 津 王乃灯
田中の母 上 月 左知子
看護婦 姉 崎 公 美
花屋の店員 藤木 あけみ

カット	画 面	セ リ フ
1	メイン・タイトル 日本語教育映画	
2	テーマ・タイトル おみまいに いきませんか ——依頼・勧誘の表現——	
3	〈電話〉 ダイヤルをまわす手～Z・B 一郎	一郎「①あっ、もしもし、い しださんのおたくです か。」
4	春子の母 B・S	春子の母「②はい、いしだで す。」
5	一郎 B・S	一郎「③あっ、おかあさんで すね。 ④ぼく、きむらです。 ⑤はるこさん、います か。」
6	春子の母 M・S	春子の母「⑥ええ、いますよ。 ⑦ちょっとまってくだ さい。」
7	一郎 B・S	春子「⑧もしもし、きむらさ ん、こんにちは。」 一郎「⑨あっ、はるこさん、 じつは、たなかくんが こうつうじこで——。」
8	春子 ヌリ	春子「⑩えっ、いつなんです か。」
9	一郎 ヌリ	一郎「⑪きのうなんです。」
10	春子 B・S	春子「⑫それで、ひどいけが なんですか。」
11	一郎 B・S	一郎「⑬さいわい、たいした けがではありません。」
12	春子 M・S	春子「⑭ああ、よかった。」 一郎「⑮でも、きゅうきゅう

		しゃでたつのがわびょういんににゅういんしました。」
		春子「⑩えっ、もういちどびょういんのなまえをいってください。」
13	一郎 B・S	一郎「⑪たつのがわびょういんです。」
14	春子 B・S	春子「⑫それで、きむらさん、おみまいにいきましたか。」
15	一郎 B・S	一郎「⑬いいえ、あしたのごいぎます。 ⑭はるこさんも、いっしょにおみまいにいきませんか。」
16	春子 B・S	春子「⑮ええ、いっしょにいきましょう。」
17	〈花屋の前〉 店先の花	
18	店先の一郎と春子 (店内に入っていく)	春子「⑯どのおはなにしまししょうか。」 一郎「⑰そうですね。 ⑱みせのひとにそうだんしてみましようか。」
19	店員と二人	春子「⑲ええ、そうしまししょう。」 春子「⑳すみません。」 店員「㉑いらっしゃいませ。」 春子「㉒おみまいには、どんなおはながいいかしら。」
20	店員 B・S (白いストックを手で指す)	店員「㉓そうですね。 ㉔こちらのおはななんか、いかがですか。」

21	一郎・春子 M・S	春子「㉑どれがいいでしょう。」 一郎「㉒このあかいのとしろいのにしませんか。」 春子「㉓じゃあ、このあかいのをよんほんと、しろいのをさんぼん、ください。」
22	赤いカーネーションをとる店員	店員「㉔これでいかがですか。」 一郎「㉕そうですね。 ㉖ちょっとすくないかな。」
23	店員ナメ二人	春子「㉗それじゃあ、あのきいろいおはなもいれてみましょうか。」 一郎「㉘そうですね。 ㉙あの—— ——はなもろっぼん、ください。」
24	黄色いフリージア	
25	店員と二人 M・S	店員「㉚はい。 ㉛きいろいのもろっぼん、いれておきます。」 一郎「㉜ええ、そうしてください。」
26	フリージアを手もと	
27	花を持つ店員	店員「㉝どうですか。」
28	店員と二人 M・S	春子「㉞とてもきれいですね。」
29	タクシーを止める二人 N・S	
30	タクシーに乗り込む二人 (タクシー、走り去る)	一郎「㉟すみません。 ㊱たつのがわびょういんまでいってください。」

31	<p>〈病室〉 病院の廊下，二人ドアの前へ 来てノックする</p> <p>二人，中へ入る</p>	<p>田中の母「④はい。」 田中の母「④あら，いちろう さん，はるこさん。」 二人「④こんにちは。」 田中の母「⑤さあ，どうぞ。」 二人「⑤はい。」</p>
32	<p>田中ナメ，二人入ってくる</p>	<p>春子「⑥こんにちは。」 田中「⑥やあ。」 一郎「⑥やあ。」</p>
33	<p>田中，起き上がろうとする</p>	<p>田中「⑦おかあさん，ちょっ とおこしてください。」</p>
34	<p>田中，母に起こしてもらう</p>	<p>春子「⑦どうぞねていてくだ さい。」 田中「⑦ええ，もうだいじょ うぶです。」</p>
35	<p>母，出ていく</p>	<p>田中の母「⑧ちょっとしつれ いします。」</p>
36	<p>花を差し出す春子</p>	<p>春子「⑧これ，おみまいの… …」</p>
37	<p>田中 B・S</p>	<p>田中「⑨どうもありがとう。 ⑩すみませんが，</p>
38	<p>立ち上がる春子</p>	<p>そのだいのうえにおい てください。」</p>
39	<p>ベッドの上に本を置く</p>	<p>田中「⑪あつ，そのほんは， ベッドのうえにおい てください。」</p>
40	<p>看護婦，入ってくる</p>	<p>看護婦「⑫はい，たいおんを はかって。 ⑬きぶんは，どうです か。」</p> <p>田中「⑭とてもいいです。 ⑮もうあるいてもいい ですか。」</p>
41	<p>看護婦 B・S</p>	<p>看護婦「⑯いいえ，まだある</p>

		いてはいけません。 ⑥くすりは、のみまし たか。」
42	田中 B・S	田中「⑥あっ、いけない。」
43	薬を飲ませる看護婦	看護婦「⑦くすりは、かなら ずのまなければいけま せんよ。」
		田中「⑦はい。」
		看護婦「⑧はい。」
		看護婦「⑨はい。」
		「⑩たいおんけいをみ せて。」
44	体温計をとり落とす田中	
45	体温計を看護婦にわたす	看護婦「⑪あっ、きをつけて ください。」
		田中「⑫すみません。 ⑬はい。」
46	看護婦 ヨリ	
47	看護婦去り、母入ってくる	看護婦「⑭まだねていなくて はいけませんよ。」
48	母、ケーキを出そうとする	田中の母「⑮いちろうさん、 そのはいざらをしたに おいてくださいますか。」
		一郎「⑯はい。」
		田中の母「⑰はい。」
		田中の母「⑱はい。」
		田中の母「⑲はるこさん、す みませんが、おさとう いれをとってください ませんか。」
		春子「⑳はい。」
		田中の母「㉑どうぞ。」
		一郎「㉒どうも。」
		春子「㉓すみません。」

49	カーネーション (フォーカス・アウト)	
50	花 (フォーカス・イン)	
51	二人立ち上がり, 去る	<p>一郎「㉘そろそろしつれいします。」</p> <p>田中「㉙そうですか。」</p> <p>一郎「㉚はやくよくなってください。」</p> <p>田中「㉛ええ, あまりしんばいしないてください。」</p> <p>春子「㉜はやく, げんきになってください。」</p> <p>田中「㉝ええ。」</p> <p>田中の母「㉞きょうは, どうもありがとうございますました。」</p> <p>田中「㉟きょうは, ありがとう。」</p> <p>二人「㊱おだいじに。」</p>
52	二人を見送る母	田中の母「㊲じゃ, しつれいします。」
53	企画・制作タイトル 企画 国立国語研究所 製作 日本シネセル株式会社	

日本語教育映画解説13

おみまいに いきませんか

——依頼・勧誘の表現——

昭和56年3月

国立国語研究所

〒115 東京都北区西が丘3-9-14

電話 東京(900) 3111(代表)

印刷所 神谷印刷株式会社

電話(912) 2571